

平成28年度

研究紀要

研究主題

基礎的・基本的な知識・技能を
身につけた生徒の育成

～「できる」「わかる」を実感できる授業づくりを通して～



平成28年度 入学式

千代田町立千代田中学校

I. 主題設定の理由

II. 研究のねらい

III. 研究の見通し

IV. 研究の内容

1. 基本的な考え方
 - (1) 「基礎的・基本的な知識・技能」とは
 - (2) 「まねる」「できる」「わかる」の定義
 - (3) めざす生徒像
2. 研修の内容と方法
 - (1) 研修の内容
 - (2) 研修組織
 - (3) 検証計画
3. 研修構想図
4. 研修計画

V. 実践の内容

1. 各教科部会の取り組み
国語
数学
理科
社会
英語
技術
保体
音楽
家庭科
2. 各教科部会の検証

VI. 成果と課題

1. 成果
2. 課題

研究同人

平成28年度の研修主題
基礎的・基本的な知識・技能を身につけた生徒の育成
～ 「できる」「わかる」を実感できる授業づくりを通して ～

I. 主題設定の理由について

平成24年度から完全実施となった学習指導要領では、生徒の「生きる力」をより一層育むことを目指している。「生きる力」とは、「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康・体力」という知・徳・体のバランスのとれた力のことである。また、教育基本法・学校教育法の改正に伴い、「学力」の重要な要素として「基礎的・基本的な知識・技能」、「知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力」、「学習に取り組む意欲」の3つが明確化され、このような学力を身につけることが求められている。

国内外の学力調査の結果からは、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題があることや、自分への自信の欠如や自らの将来への不安が見られるのが児童・生徒の現状であることが明らかになっている。そのため、このような現代の児童・生徒の状況と課題を認識して研修を進めることが必要である。

本校の生徒は、素直で指示されたことはしっかり取り組むことができる。しかし、課題として、思考力や表現力の向上がまだ十分でないことが挙げられる。思考力や表現力の向上のためには、考えの交流だけでなく、考えを書く、説明する、論述するなどの言語活動を充実させ、能動的な授業への参加を促し、家庭学習へ取り組む意欲も高め、基礎的・基本的な知識・技能の向上を図る必要がある。

昨年度の研修では、「めあて」「振り返り」を徹底し、その間を「まねる」「できる」「わかる」というスモールステップを意識して授業を構成していくことで、生徒に「できた」「わかった」という達成感を抱かせていくと共に、生徒の基礎的・基本的な知識・技能の習得の促進を図った。学力向上と関連させて、教科を問わず全職員が意識すべき七つの項目を「千代田中の七つの掟」と題し、毎日の授業で意識することで、授業改善に励むことにした。

その中で、見えてきた課題が二つある。一つ目は、「基礎的・基本的な知識・技能」の定義が、学力向上との兼ね合いで、最終的に「テストで点がとれる」という解釈に偏ってしまったこと。二つ目は、5教科中心の研修になってしまい、技能教科の研修が疎かになってしまったことである。

昨年度の研修を通して、「めあて」「振り返り」の有用性を再確認し、それを日々の授業実践で徹底しようとする教員側の姿勢や、生徒の「振り返り」の中での変容が認められたという成果もあがった。これを鑑みて、今年度は昨年度の研修を引き継いで、課題を解決し、さらに研修内容を深化させていこうと考える。

II. 研究のねらい

各教科において、基礎的・基本的な知識・技能を身につけた生徒を育成するためには、生徒が「できる」「わかる」を実感できる授業づくりをしていくことが有効であることを明らかにする。

III. 研究の見通し

- ① 授業過程を「まねる」「できる」「わかる」という手順で展開すれば、「できる」「わかる」生徒が増えるであろう。
- ② 各教科において、「できる」「わかる」を実感できる生徒が増えるような授業実践ができれば、基礎的・基本的な知識・技能を身につけた生徒の育成につながるであろう。

IV. 研修の内容

(1) 「基礎的・基本的な知識・技能」とは

基礎的・基本的な知識・技能とは、それらを活用する力を育成するための土台となるものであり、学習指導要領に示されるように、生徒が実感をもって学習内容を習得できるような体験的な理解を重視し、発達段階に応じて徹底して習得させ、生徒の学習の基盤を構築していくものである。

昨年度、「基礎的・基本的な知識・技能」が「テストで点がとれる力」という理解に偏ってしまったことを反省し、今年度は、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」を「単元ごとの達成目標に到達すること」と共通理解することにした。教師がその到達を意識しながら授業の流れを工夫し、生徒に確実に基礎的・基本的な知識・技能を習得させていくことが、それらを活用する力につながり、本校のめざす生徒像である「自ら意欲的に学び、正しく判断できる生徒」を達成できるであろう。

生徒が単元ごとの達成目標に到達させるための授業づくりの基本となるのが、「めあて」「振り返り」を徹底して授業に取り入れ、その間をスモールステップでつなげることだと考えた。その過程を「まねる」「できる」「わかる」と名付けた。以下に本研修におけるこれらの言葉の定義を示す。

(2) 「まねる」「できる」「わかる」の定義

「学ぶ」の語源が「真似ぶ」にあるように、学習の基本は概ね模倣の形をとる。曾野綾子氏は『人間の基本』において「教育が自発的であるべきだというのは異常な感覚で、教育はごく初期の幼児期のものと、いくつになっても初めてやることに関しては全部強制の形をとります。」と語っている。また、岡本浩一氏は『上達の法則』の中で「模倣は学習の基本である。最近の教育の風潮は模倣を軽視してきたが、誤った風潮だと私は考える。『声に出して読みたい日本語』の著者として名高い齋藤孝氏も、生きる力のもっとも大切な力として「段取り力」「コメント力」と並べて「まねる力」を挙げている。」と語っている。ここから、一時間の授業の中で「わからない」「できない」生徒が出ないように、「まねる」ことを基本とした授業展開を本校のパターンとする。

- 「まねる」**…学習活動の導入が「模倣」の形をとっていること。次に来るであろう学習活動を生徒全員が達成するための、可能な限り細分化されたステップの始め（全く同じ事を繰り返す作業でなくても良い）。この段階で、学級内（ほぼ）全ての生徒が「まねる」ことのできる活動が望ましい。
- 「できる」**…本時の「めあて」に直結する学習活動。「まねる」学習活動から徐々に（可能な限りスモールステップで）レベルアップしていくと、「できる」生徒は「まねる」段階を達成していた数から減らない。細分化された学習活動なので難易度は低め。それをカバーするのは、最低到達度（「めあて」）を意識しながらも、上位の生徒の学習意欲を削がない工夫である。そこには授業の「リズム」も介在する。
- 「わかる」**…「できる」段階において、自分ができたことを言葉で明確に表現できること。振り返り。

以下に各教科の活動例を挙げる。

教科	身につけさせた知識・技能	まねる	できる	わかる
国語	レ点の使い方がわかる。	二三字程度でレ点の一つの熟語にレ点をつけて読む練習をカードなどで繰り返し行う。	<input type="checkbox"/> レ <input type="checkbox"/> 左図のような2 <input type="checkbox"/> パターン <input type="checkbox"/> の練習 <input type="checkbox"/> 問題を解く。 <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 2	自分で考えた短文の語順を入れ替え、レ点を用いて正しく読む練習問題を作り、解きあう。

数学	減法の計算ができる	反対向きの性質を利用して減法を加法に変える	減法の式を加法に変えて計算できる	減法は加法に変えることで計算することができる
理科	遺伝の規則性について理解する。	・実験や観察の方法を知る。 ・キーワードや基礎となる事物・事象について理解する。	・操作の役割を理解した上で実験や観察ができる。 ・規則性に気付き、その事象について説明できる。	・実験や観察の結果から、自分の言葉で考察できる。 ・理解した知識や概念を日常生活とリンクできる。
社会	時差の計算ができる	東京とロンドンの時差の求め方をまねる	他の都市との時差を求めることができる	西経、東経を含む確認問題を解くことで時差の問題が分かる
英語	受動態の文を作ることができる。	受動態の文を読んだ後に、教師が主語だけ変えて言い、その主語を使って以下同じ文を読む。	主語と動詞が変わったもの、目的語が変わったものと少しずつ難易度を上げた練習問題に取り組む。	・受動態の文を使って、英作文ができる。 ・受動態の文の作り方を、注意点を踏まえて日本語で説明できる。
美術	レタリングを1人で描くことができる。	教師が「永」を明朝体で生徒の前で実際に描いて、生徒がまねをしながら描く。	1人で「永」を明朝体で描くことができるようになる。	明朝体の特徴を踏まえた描き方を理解することで、「永」以外に自分の名前をレタリングできる。
技術	のこぎりを使った木材の切り方を理解させる。	教師の切り方を見せ、同じ木材を使って、それをまねして同じように切らせる。	自分の作品で、練習と同じように切らせることで、自分の作品をのこぎりで切ることができる。	自分の作品を切らせ、作品が完成することで、のこぎりを使った木材の切り方がわかる。
家庭	まつり縫いをすることができる。	まつり縫いの良いところを知る。動画や教師の説明、手本の実物などをみながら縫い方を知る。	まつり縫いをすることができる。	表に、まつた糸があまり見えないように（表0.1mm、間隔0.8mm）でまつり縫いができたり、友達に教えたりできる。
保体	倒立前転ができる。	補助倒立を行った後に、教師の試技を参考にしながら、補助等をやりながらまねる。	1人で、倒立前転をすることができる。	倒立からの重心移動をスムーズに行い、頭部のいれるタイミングがよいと、うまくできることがわかる。
音楽	アルトリコーダーの運指を正しく押さえることができる。	・左右の手を逆にした状態（鏡のように）で模範演奏をする。 ・教師や友達の演奏を聴いて、指の動かし方やよいところをまねる。	一人で簡単な曲を演奏することができるようになる。	演奏することが楽しくなり、練習する機会が増え、正しい運指がわかるようになる。

めざす生徒像 「基礎的・基本的な知識・技能を身につけた生徒」

具体像

- ・ 単元毎の達成目標に到達できる生徒
- ・ 能動的に授業に参加することができる生徒
- ・ 家庭学習へすすんで取り組める生徒

2. 研修内容と方法

(1) 研修の内容

- ・ 単元ごとにつけたい力を明確にし、それに基づき単元時数ごとの「めあて」を設定する。また、一授業のなかで生徒の変容が見とれるよう「振り返り」も行う。
- ・ 本時において、習得させたい知識・技能を明確にし（ねらいを明確にする）、その知識・技能を確実に習得させるための可能な限り細分化された「まねる」「できる」「わかる」というステップ（上述の「めあて」「振り返り」つなぐ過程）を意識して授業構成を行う。
- ・ 校内相互授業参観を実施する。

----- (以下、研修資料より抜粋) -----

テーマは「**授業過程（授業作り）の工夫**」です。生徒の基礎的基本的な知識技能の育成に向けて、上記について焦点を絞り、研修を行っていきたいと思います。

再度、校内研修（6，7の項目）について共通理解を深めます。



Q：今年度の校内研修では個人レベルでは何をすればいいの？



A：ねらいを明確にした計画的な授業作りをしていきましょう！

「めあて」「振り返り」を行うために、一授業の中で生徒につけたい力を明確にしていきたいと思います。その一授業の終わりに、生徒がどのように変容していれば（なにができるようになっていけばいいのか、なにが分かっていけばいいのか）その授業は成功したと言えるのでしょうか？それを考えるためには、「**振り返り場面において、生徒にどのような振り返りを望むのか**」を想定しておく必要があります。そして、その振り返りを自発的・自然発生的に誘発する有機的な問いや課題が「めあて」として設定されます。そこで大切になってくることは、単元毎の CanDo です。単元の達成目標（到達目標）を与えられた単元時間で分割することで、一時間毎の「めあて」ができあがります。

$$\boxed{\text{単元の達成目標}} \div \boxed{\text{単元時間}} = \boxed{\text{毎時間の「めあて」(達成目標)}}$$

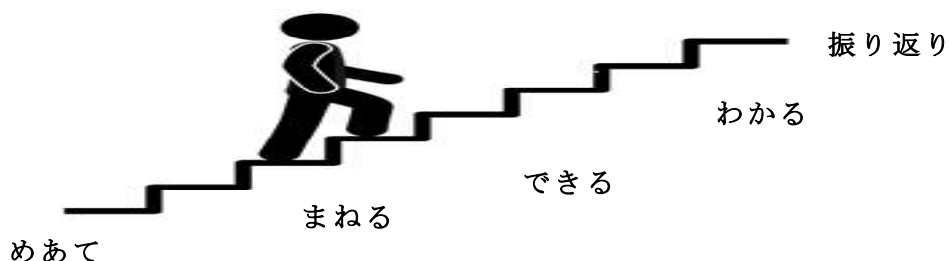
ここでは、「振り返り」と有機的に結びついた「めあて」を設定する授業を、「**ねらいを明確にした授業**」と理解し、単元の達成目標を単元時間で割り、一授業毎の「めあて」を設定することを「**計画的な授業作り**」と考えて下さい。



Q：「まねる」「できる」「わかる」を意識するって、どういうこと？



A：「めあて」という麓から「振り返り」という山頂をつなぐ、どんな生徒でも登れる階段を作ることです！



勉強熱心な先生ほど書物や講演、公開授業で見た授業などから発想を得て、加算的に授業を考えてしまうそうです。しかし、その発想がその授業の「めあて」に添うかどうかは、**逆算的な授業作り**をして判断するものです。

指導案を書くときには、当然ですが上から（時間の流れに沿って）書き始めます。しかし、横浜国立大学の河野俊之教授は「**指導案を考える時は逆から考えること**」と提言されています。そして、その逆算的な授業作りで最も大切になってくるのが、「**明確なねらいをもっていること**」ということだと考えます。



Q：要するに今年の校内研修って何を追求するの？



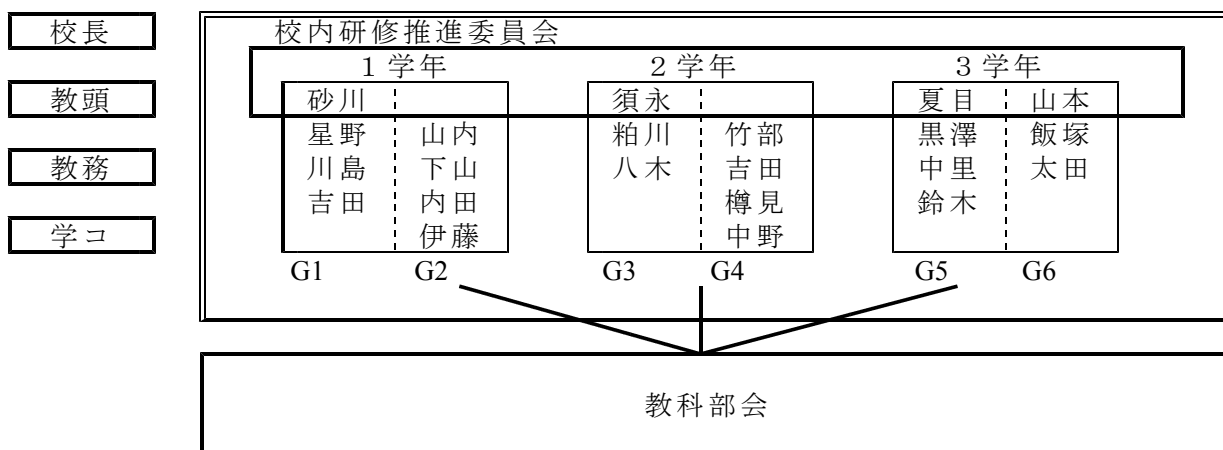
A：単元の達成目標から「逆算的」に考えた明確なねらいのもと、それに迫るべくスモールステップの授業を毎時間「逆算的」につくっていくことが、生徒の基礎的・基本的な知識・技能の育成（学力向上）に繋がるかを検証します！

キーワードは「**逆算的**」授業作りです。

抽象的には、「漠然と思い描く（文科省より打ち出された）目指す生徒像、求める力」、具体的には、「そこに至るための細分化された学習活動・手立て・支援」を考えます。この間を頭の中で右往左往しながら、授業力向上を目指しましょう！

-----（以上、研修資料より抜粋）-----

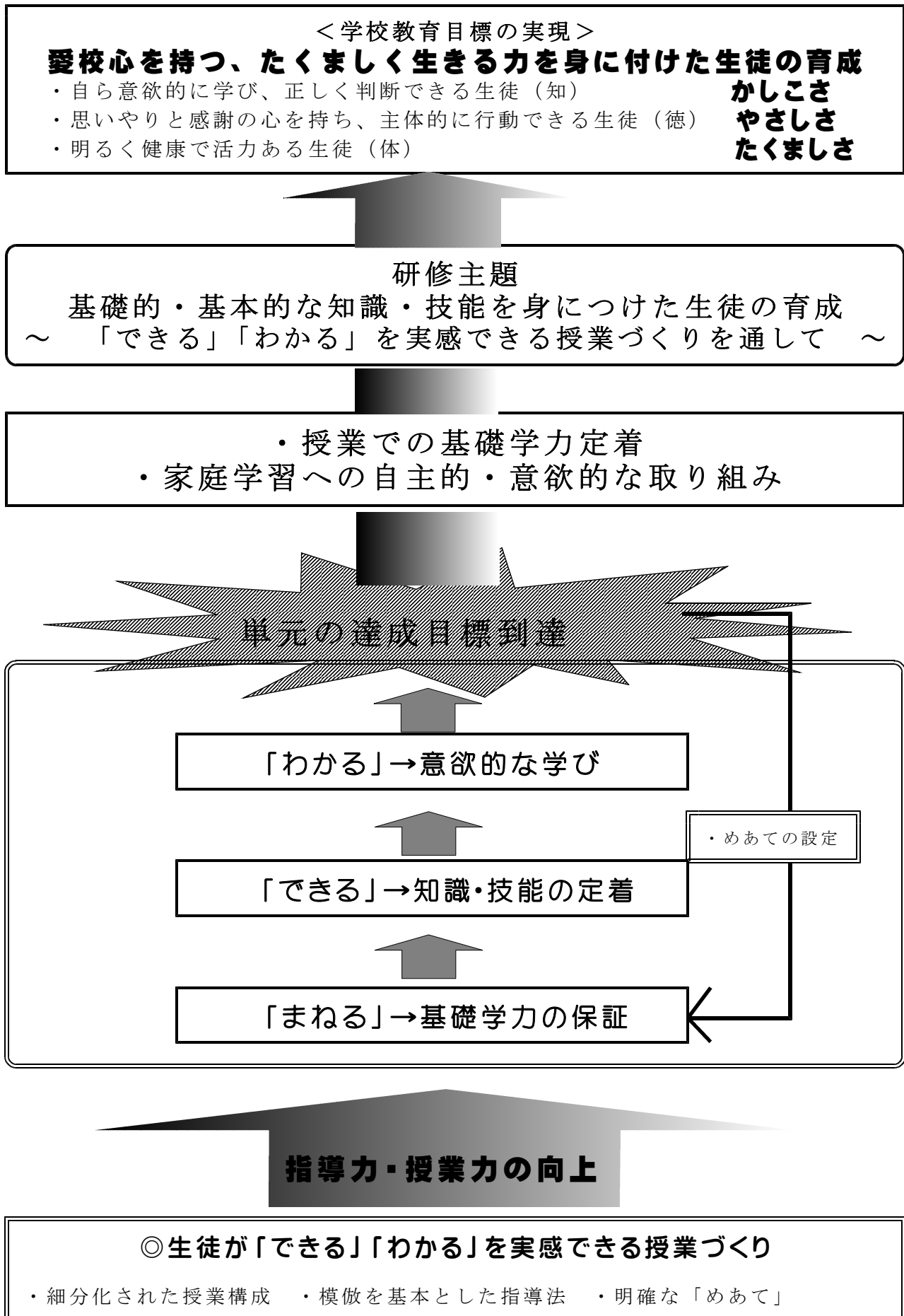
（２）研修組織について



（３）検証計画

検 証 計 画		
検証の観点	授業・活動	検証の方法
<p>○生徒が「できる」「わかる」を実感できる授業づくりを行っていくことは、生徒の基礎的・基本的な知識・技能を身につける上で有効であったか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の中の「できる」活動における見取り ・「振り返り」 ・各教科における学力テスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間巡視、発表 ・振り返り（定性） ・ワークシートやノートの記述、発表 ・CRT、定着確認のための外注テストなどの結果の推移比較（定量） ・家庭学習（自主学习）の提出量の推移

3. 研修構想図



4. 研修計画について

月/日(曜)	推進委員会・全体会	教科部会等	過程	
4/6(水) 4/7(木) 4/22(金) 4/25(月)	推進委員会1 研修副題・内容 全体会① 研修副題・内容 推進委員会2 内容・前期訪問 全体会② 内容・前期訪問	教科毎の「まねる」「できる」「わかる」の活動例の考案	理論立て	
5/13(金)	推進委員会3 前期訪問・研修計画について			
5/16(月)	全体会③ 前期訪問・研修計画について	学習の手引きの配布		
5/26(木)	前期学校訪問			
5/27(金)	推進委員会4 前期訪問を受けて研修計画や指導の工夫の修正			
6月中 6/13(月) 6/24(金) 7/11(月)	第一回相互参観授業(6月中) 全体会④ 前期訪問を受けて研修計画や指導の工夫の修正 推進委員会5 研修の経過報告・見直し 全体会⑤ 研修の経過報告・見直し			実践
夏休み	夏休み特別研修(各教科)			
9/2(金) 9/7(月)	推進委員会6 研究授業指導案について 全体会⑥(職) 研究授業指導案について	教科部会での活動		
10月中 10/14(金) 10/17(月)	第2回相互参観期間(10月中) 推進委員会7 相互参観報告 後期訪問について 全体会⑦ 後期学校訪問指導案検討(模擬授業)			研究
10/31(月) 11/1(火)	後期訪問最終打ち合わせ 後期学校訪問 授業者:伊藤・八木			
11/11(金) 11/14(月) 11/25(金) 12/1(月)	推進委員会8 後期学校訪問の反省・今後の課題の確認 紀要作成について 全体会⑧(職) 後期学校訪問の反省・今後の課題の確認 推進委員会9 研修内容の検証について 全体会⑨ 研修内容の検証について		検証	
1/13(金) 1/16(月)	推進委員会10 紀要作成についての提案・確認 全体会⑩ 学紀要作成についての提案・確認			
2/24(金) 2/27(月)	推進委員会11 研修のまとめ 紀要作成について 全体会⑩(職) 研修のまとめ 紀要作成について	紀要原稿教科別検討	実証	

V. 実践の内容

1. 各教科部会の取り組み

国語科学習指導案（2年2組）

平成28年11月1日（火）第3校時（10：50～11：40）2年2組教室

指導者 八木 絵理子

1 単元（題材）名 関わりの中で 「推敲して適切な文章に直す」

2 考察

（1）教材観

①学習内容：学習指導上の位置づけ

B 書くこと（1）エ書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係などに注意して、読みやすく分かりやすい文章にすること。

②主な伸ばしたい資質・能力

- ・書いた文章を、語句や文の使い方などに注意して客観的に見直すことができる。
- ・書く相手や目的を明確に意識し、相手にとって分かりやすい文章に直すことができる。
- ・推敲した文章に語句などの誤りがないか、より具体的になっているかなど評価することができる。
- ・推敲した文章の評価を、自分が文章を書く際に生かすことができる。

③そのために必要な指導・学習活動

- ・適切な語句や文の使い方を身につけるために、身近な内容の短文を例にして間違いを指摘する。
- ・書く相手や目的を明確に意識するために、誰に向けて書いたものかを明示する。
- ・適切な語句や文の使い方などを「上達のポイント」を参考にして、ワークシートに書き直す。
- ・推敲後、ペアで確認して「上達のポイント」に気をつけながら評価し合う。
- ・推敲した文章を発表しながら、なぜ誤りであったか、どう訂正するかを説明し合う。

④今後の学習の活用

本題材で推敲のポイントについて学び、評価をし合うことで、今後の様々な「書く」活動に生かしていけるものとする。次の題材である「気持ちを込めて書こう—手紙を書く」や、職場体験のお礼状や一年のまとめの報告書作り、総合の発表原稿などの国語以外の活動においても、本題材の学習が活用されると考える。

（2）生徒の実態及び指導方針（36名）

①既習の学習内容や活動

書くことについては、小学校低学年から想像したことを順序立てて書く、中学年では相手や目的に応じ相手に伝わるように段落の関係に気をつけて書く、高学年では目的や意図に応じ文章全体の構成に気をつけて書くという学習をしてきている。中学校では1年次に日常生活に関わる事柄について文章全体の構成を考へて的確に書くという学習を行っている。2年次では、1学期に職業調べにおいて調べたことを項目を立ててレポートにまとめるという学習をしてきている。

②本単元に関わる生徒の実態

本学級の生徒は、与えられた課題に対して真剣に取り組み、自分の考えをもととする生徒が多い学級である。少人数での話し合い活動の際には自分の意見をはっきりと述べ、伝えようとする姿勢が多々見られる。書いたものを交流する場面でも、お互いにはっきりと指摘をし合うことができる。また、レポートをまとめたり単元後の振り返りシートを書いたりするといった活動においても、与えられた文字数はしっかり書き、工夫できる部分は項目を立てたり分かったことや分からなかったことを分けて書くなどの姿勢が見られた。しかし、授業中は全体の前で挙手をすることに消極的な生徒も多いため、必ず少人数での交流をもってからでないと、多くの発言は望めない。また、低位の生徒については個別に声かけをしたり、目の前で見本を見せたりするなどの支援が必要である。

③指導方針

- ・職場体験にからめてこの単元を提案することで、めあてに必然性をもたせる。
- ・「上達のポイント」を参考にし、事前に身近な内容の短文を例にすることで、「推敲」

するということについて具体的にイメージできるようにする。(まねる)

- ・書く相手や目的についてメモをとったり線を引かせたりすることで、相手意識や目的意識が明確になるようにする。
- ・低位の生徒にはヒントを与え、「上達のポイント」を参考にしていくつか例に挙げて推敲することで、自分が推敲すべき項目を焦点化できるようにする。(できる)
- ・推敲した文章を、「上達のポイント」に沿ってペアで確認することによって、客観的に理解できるようにする。
- ・発表する際になぜ誤りであったかと、それをどう訂正したかを説明し合い観点をはっきりさせることで、今後の学習に生かせるようにする。(わかる)
- ・ICT機器を使用することで、黒板を有効利用して生徒の集中を促すようにする。

(3) 校内研修との関わり

「基礎的・基本的な知識・技能」を身につけさせることは、その後の活用する力を育てることにつながる。本校の目指す「自ら意欲的に学び、正しく判断できる生徒」のためには、その「意欲」を喚起することや、「正しく判断」するための「基礎的・基本的な知識・技能」の習得が必要不可欠である。そのため、「まねる」「できる」「わかる」というスモールステップを踏みながら、授業を展開していく必要がある。

本単元では、教科書の文章を推敲するのに必要な観点を、身近な短文の推敲の仕方を例示することで、それをまねて文章を推敲できるようにする。また、推敲したものを全体で確認し合うことで、次単元に生かすための適切な推敲の観点をわかるようにする。

3 単元(題材)の目標

文章を正しく推敲する観点を理解することで、客観的に見直すことができ、読みやすく分かりやすい文章にすることができる。

4 評価規準

評価の観点	評価規準
関心・意欲・態度	「上達のポイント」を参考にしながら、推敲する箇所を見つけて直そうとしている。
書くこと	・推敲する箇所を「上達のポイント」に沿って適切に書き換える。 ・ペア学習の際に相手の文章を観点に沿って客観的に検討している。

5 指導計画(全1時間予定)

学習過程	時間	○ねらい・学習活動	指導上の留意点	評価の観点				
				関心	話聞	書く	読む	伝国
	1	○推敲の観点について理解し、短文を正しい文に直すことができ、教科書の文章を観点に沿って書き直すことができる。	・「推敲」という言葉の意味や文章を書く上で多い間違いを指摘し、身近な問題であると意識させる。	○		○		
まねる		・推敲という言葉の意味を理解する。 ・誤りのある短文を、正しい文に直させる。	・誤りのある短文を示し、正しい文に直させることで、推敲するという作業のイメージをつかませる。					
できる		・推敲の観点について「上達のポイント」を参考にして理解する。 ・教科書の文章を、観点に注意しながら書き直し、ペアで確認し合う。	・「上達のポイント」を参考にして、教科書の文章を書き直すことで、誤りのある表現に着目し、正しい文章に直そうという意識を持たせる。					
わかる		・なぜ誤っているか、どう訂正し	・訂正した部分の疑問点					

	たかを説明し、検討し合う。	を挙げることで、全体の共通理解を図る。 ・誤っている箇所、訂正の仕方を検討し合うことで、より相手に伝わりやすい文章にしようとする姿勢を持たせる。					
--	---------------	---	--	--	--	--	--

6 本時

(1) ねらい

推敲の観点について理解し、短文を正しい文に直すことができ、教科書の文章を観点に沿って書き直すことができる。

(2) 授業改善の視点

あらかじめ短文を示して推敲の仕方を例示し（まねる）、教科書の文章に取り組みせることは、誤りのある表現に着目し、正しい文章に直せるようになり（できる）、推敲に必要な観点を理解する（わかる）ことに有効であろう。

(3) 準備

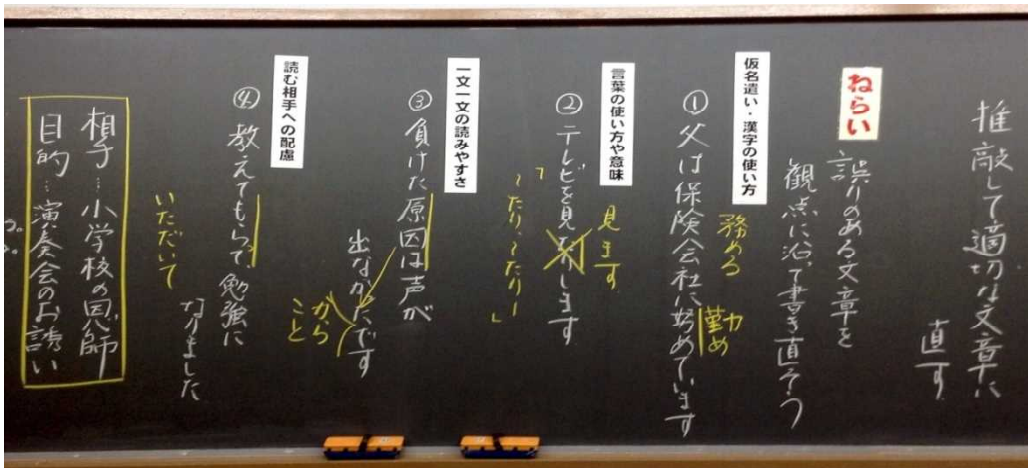
i p a d テレビ ワークシート

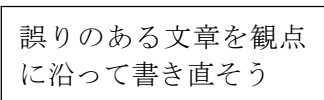


(4) 展開




学習活動 ・予想される生徒の反応	時間	指導形態	指導上の留意点及び支援・評価 ◎努力を要する生徒への支援 ◇評価
1 本時のねらいを確認する。	3	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・TVを見るよう促す。 ・職場体験が間近に迫っていることから、そのお礼状を書くために必要なものは何かを問い、今回の学習に必然性をもたせるようにする。
2 「推敲」について教科書の説明を読み、本時は教科書の文章を上達のポイントに沿って伝わりやすい文章に直すための練習をすることを理解する。	5	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・TVを見て、教科書に線を引かせるようにする。 ・「推敲」について正確な理解をするために、教科書の該当箇所に線を引かせるようにする。
3 誤りのある短文を1つ例示し、他の短文はそれをまねて正しい文に直させる。（まねる）	10	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板を見るよう促す。 ・「上達のポイント」の観点を示し、身近な内容の短文を例示することで、意欲を喚起するとともに、「推敲」のイメージをもたせる。 ・他の例文を提示し、なぜ誤りであるか、どう訂正するかを確認し、「上達のポイント」のどれに対応するかを確かめる。 ・教科書の例文も同じように推敲が可能であることを伝える。
4 教科書の文章を、観点到に注意しながら書き直す。（できる）	10	一斉 (ペア)	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書を見るように促す。 ・教科書の例文を音読する。 ・相手意識、目的意識をもたせるために、ワークシート上部にそれらを明記させる。 ・教科書の文章を写したワークシートに「上達のポイント」を参考にしながら推敲させる。 ◎手が止まっている生徒については、机間支援をしながらどの番号がどのポイントと対応しているかのヒントを与えることで、自分で考えられるようにする。 ・ペアでの相談タイムを2分程度確保する。
5 推敲した文章を、正し	20	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・TVを見て、自分のワークシートと見比べて

<p>い文章に直っているかどうか確かめる。(わかる)</p>		<p>確認するように促す。 ・ワークシートの①～⑩までを、生徒を指名して確かめる。 ・どこが間違いで、どう訂正したかの説明を求める。 ・例示した解答以外の訂正の仕方考えた生徒には、その整合性を全体に投げかける。 ・訂正の種類は一つではなく、文章全体を見ていくつかの訂正の仕方が可能であることを示す。 ◇教科書のポイントを参考にし、適切に書き直すことができる。(見取り：ワークシート) ◇誤った箇所について、全体での確かめを聞いて赤で訂正している。(見取り：ワークシート)</p>
<p>6 振り返る</p>	<p>2 一斉</p>	<p>・「上達のポイント」を参考にしながら教科書の文章を自分なりに訂正することができたか確認し、推敲に必要な観点を振り返らせるようにする。</p>

7 板書計画



学習過程	学習活動	生徒の様子
<p>導入</p>	<p>・ねらいの提示   ・推敲と言葉の意理解する。いう味を</p>	<p>・ねらいを提示する際、生徒が主体的に考えてねらいを設定できるよう、職場体験のお礼状作りと関連させて提示した。すると、お礼状を書く際に見直しが必要であること、見直しをするためにはその観点が必要であることが生徒から提案された。 ・ipad を用いて教科書の該当箇所をテレビに映し、赤線を引いた。</p>
<p>まねる</p>	<p>・誤りのある短文を、正しい文に直させる。  ・推敲の観について「上のポイント」参考にして理解する。点達を理</p>	<p>・「上達のポイント」と短文がどのように対応しているのか確かめた。生徒から「漢字が違う」「～からが抜けている」「～が続いていない」などの指摘が聞こえた。 ・4つの観点をノートに整理させたが、予定よりも時間がかかった。</p>
<p>で</p>	<p>・教科書の文章を、観点に注意しながら</p>	<p>・教科書の観点とワークシートの番号が対</p>

きる	ら書き直し、ペアで確認し合う。 	応していることを伝え、低位の生徒には指さしをしながら一つずつ確認し進めた。 ・何が間違いかは分かって、どう直したら良いのか分からずに手が止まる生徒が多く見られた。
わかる	・なぜ誤っているか、どう訂正したかを説明し、検討し合う。 	・教科書に書いてある観点の番号と、ワークシートの番号が対応していることを伝えると、誤りのある部分の観点が何かを、多くの生徒が答えることができた。 ・ペアでの学習の際に、解答に自信が持てない部分や分からない部分を中心に相談するよう促した。しかし、時間が足りずに相談が中途半端で終わってしまうペアも見られた。
振り返る	・観点を理解し、推敲できたか振り返る。 	・「上達のポイント」を参考にし、推敲に必要な観点4つを確認した。 ・観点は言えても、どう直すべきか、具体的な理解をしている生徒は少なかった。

9 授業の反省

今回の実践において「まねる」「できる」「わかる」のステップを確実に踏ませるには「板書をノートに写す時間をなるべく短くし、生徒の活動量を増やすこと」「解く問題を精選し、よりねらいに迫れるようシンプルにしていくこと」だと感じた。「まねる」の段階においては、板書を写すだけであっても生徒によって個人差が大きいため、ワークシートなどで穴埋めにする、写す場所を限定するなどの工夫が必要であった。また「できる」「わかる」の場面を通しては、よりねらいに迫り観点到に着目させるために、教科書の文章を最初からくまなく推敲するのではなく、観点到に沿って必要な部分だけの問題を解くなど、授業で扱う問題を精選して与える情報量を減らしていく必要があった。

今後は、間違いやすいポイントの直し方、言葉のリストなどのテンプレート化を行い「まねる」材料を増やしていくことでより分かりやすい授業作りに努めたい。

10 実践の成果と課題

成果

- ・iPad やテレビを用いて生徒が使っている教科書やプリントなどを提示しながら説明などをすることで、低位の生徒にもわかりやすく提示できた。また、板書などの消えてしまう提示物をのこしたまま授業を進めていくことができた。
- ・「わかる」場面において「上達のポイント」を参考にすることで、観点的の確認がスムーズにでき、前段階よりも推敲が進んでいる生徒が多く見られた。

課題

- ・「まねる」場面において、板書を写す作業もあり時間配分がうまくいかなかった。ワークシート作りを工夫するなどの手立てが必要であった。
- ・観点的の提示の仕方は分かりやすかったが、「一文一文の読みやすさ」「読む相手への配慮」という観点的においては生徒には理解しづらい部分があった。言葉をかみ砕いて説明するなど、より具体的に提示する手立てをもつべきだった。
- ・「できる」場面において、最初から生徒の個人作業ではなく観点的の一部分だけでも全体で進められるとよかった。
- ・「観点的」に着目させたいのであれば、教科書の文章を最初からくまなく推敲するよりは「観点的」ごとに必要な部分だけ全員で振り返るようにした方が「観点的」をより意識させられたと思う。

数学科学習指導案

平成28年5月26日(木) 第3校時

2年3組(2年3組教室) 指導者 樽見 昭

指導者 T2 黒澤 宏明

T3 中野 聡

1. 単元名 第1章 『式と計算』 (大日本図書)

2. 考察

(1) 教材感

① 学習内容 学習指導要領上の位置づけ

A 数と式 (1) 具体的な事象の中に数量の関係を見だし、それを文字を用いて式に表現したり式の意味を読み取ったりする能力を養うとともに、文字を用いた式の四則計算ができるようにする。

ア 簡単な整式の加法、減法及び単項式の乗法、除法の計算をすること。

イ 文字を用いた式で数量及び数量の関係をとらえ説明できることを理解すること。

ウ 目的に応じて、簡単な式を変形すること。

[用語・記号] 単項式 多項式 定数項 同類項 次数

② 主な伸ばしたい資質・能力

・既習事項と比較したり結びつけたりしながら、性質などを帰納的、類推的に見いだすことができる。

・事象の様子を数学的にとらえ、帰納、類推、演繹の数学的な推論を適切に用いて考えることができる。

・考えの根拠を明確にして、数学的に表現を適切に用いて表し、自分の考えを筋道立てて説明したり、相手の考えを読みとったりすることができる。

③ そのために必要な指導・学習活動

・文字を用いたり式の計算も、数の計算と同じように基本的な法則に従って加減乗除ができることを理解し、式の基本的な操作ができるようにする。また、式を目的に応じ見通しをもって的確に用いることができるようにし、数量の関係を一般的、能率的に考察し、処理することができるようにする。さらに、連立二元一次方程式について理解し、具体的な場面でそれを用いる能力を培う。

④ 今後の学習の活用

・文字式の学習内容を活用することを通して、文字や文字式に対する認識をより深めるとともに、新たな問題場面に直面したときに、文字式を活用しようとする意欲を育てる。文字式を使った説明は、今後の図形の証明と関連が深い。また、等式の変形は、方程式を解くときの同値変形と同じ考え方に基づいているし、関数の式の表現などへとつながる。

(2) 児童生徒の実態及び指導方針 (35名)

① 既習の学習内容や活動

第1学年では、数の範囲を正の数と負の数にまで広げ、四則計算の意味の拡張と関連して、計算法則を理解している。また、文字を用いて数量の関係や法則などを式に表現したり式の意味を読みとったりできるようにしている。

② 本単元に関わる児童生徒の実態

本学級の生徒は男子20名、女子15名、計35名で構成されている。数学の実態を次のように捉えた。

【数学への関心・意欲・態度】

授業に対してとてもまじめに取り組む生徒が多い。聞かれた質問に対しては、しっかり答えることができている。しかし、積極的に発言するまでには至っていない。また、家庭学習においては、授業で出される宿題は、忘れることなくしっかり取り組むことができている。週1回の自主勉強も毎週クラス全員が、提出できるほど数学への関心がある。

【数学的な見方や考え方】

基礎・基本が定着していない生徒にとってはもっとも苦手とする分野である。今までの既習事項と結びつけて考えることが苦手だったり、関係を発見することができない生徒が多い。また、答えを出すことができても、うまく言葉で説明できる生徒は少ない。そこで、説明し合えるような場を設定し経験を積みさせていきたい。

【数学的な技能】

定期テストや豆テストでは、意欲的に取り組み、計算が良くできる生徒は多く見られる。しかし、覚えた計算方法も時間がたつと忘れてしまったり、ケアレスミスがでてきてしまったりする生徒もいる。日頃の計算練習不足による影響もある。そこで、基本的な内容を繰り返し復習することを通して、表現したり処理したりする力を伸ばしていく必要がある。

【数量や図形などについての知識・理解】

新しい用語や記号については、抵抗なく素直に吸収することができる。しかし、時間がたつと忘れてしまう生徒もいるため、復習の場を定期的に設定して定着させていきたい。

③指導方針

- ・授業の初めには既習事項の確認の時間をしっかりととり、定着を図るとともに本時への意欲を高めさせる。
- ・学び合い活動などで多く取り入れ、生徒がしっかりと考え、発表できるような場面を多く作る。また、発言ができる雰囲気作りに努める。
- ・授業で、板書・ノート書きの指導などを丁寧に行い、発問を工夫する。

3. 単元の目標

・中学校1年で学習した文字と式の内容をさらに拡充し、いくつかの文字をふくむ整式の簡単な四則計算ができる。さらに、事象の中に数量の関係を見だし、それを式に表現し、目的に応じて式変形するなど、式を活用する能力を伸ばすとともに、文字式を利用することのよさを理解する。

4. 評価規準

数学への 関心・意欲・態度	数学的な 見方や考え方	数学的な 技能	数量や図形などについて の知識・理解
さまざまな事象を文字を用いた式でとらえたり、それらの性質や関係を見いだしたりするなど、数学的に考え表現することに関心をもち、意欲的に数学を問題の解決に活用して考えたり判断したりしようとしている。	文字を用いた式についての基礎的・基本的な知識及び技能を活用しながら、事象を数学的な推論の方法を用いて論理的に考察し、表現したり、その過程を振り返って考えを深めたりするなど、数学的な見方や考え方を身に付けている。	文字を用いた式で表現したり、その意味を読みとったり、簡単な整式の加や減法を計算したり、単項式の乗法や除法の計算をしたり、簡単な式の変形をしたりするなど、技能を身に付けている。	文字を用いた式で数量及び数量の関係を捉え説明できることを理解し、知識を身に付けている。

5. 指導計画（全12時間予定）

学習 過程	時	○ねらい・学習活動	指導上の留意点	評価の観点			
				関	思	技	知
1. 単項式と多項式	1	○式は項の個数に着目することで単項式と多項式とに分類できる。	・単項式の次数は、文字の種類ではなくいことをはっきりさせることにより、かけ合わされた文字の個数であることを押さえさせる。	○		○	○
2. 同類項	2	○分配法則を使って同類項をまとめることができる。 ・同類項をまとめ計算する。		○		○	
3. 多項式の加法減法	3	○加法減法乗法除法の意味と計算の仕方を知り、その計算ができる。 ・四則の計算に取り組む。	・加法と減法の解き方の相似点、乗法と除法の解き方の相似点に気付かせることで計算方法を理解し、定着につなげるようにする。			○	○
4. 単項式と単項式の乗法	6					○	○
5. 除法						○	○
6. 多項式と数の計算						○	○
7. 式の値	7	○2つの文字をふくむ式の値を求めることができ、式の値を求めるには、式を簡	・解き方を2つとも提示することで、最初に代入する場合と式を計算をしてから代入す		○	○	
8. 練習	8					○	○

		単に計算してから代入するとよい場合があることを知る。 ・式の文字に数を代入して式の値を求める。	る場合とで答えは変わらないことを確認し、式を計算してから代入の方が計算が早い場合があることにわかる。				
9. いろいろな数量とその調べ方 10. 数の性質とその調べ方	9 ～ 10 本時	○具体的な場面で、文字を有効に使って数量の大きさや数量の間の関係を表すことにより、数の性質を一般的に説明することができる。 ・文字を有効に使い、数の性質を説明する。	・始めに数を当てはめ予想をさせ取り組ませることで、文字の使うよさや容易に比較できることに気付かせ、そのことを説明する活動につなげさせる。			○	○
11. 等式の変形 12. 章の問題	11 12	○等式を目的に応じて変形することができる。 ・等式を目的に応じて、変形する	・一年の時は文字 x を求めるために、左辺を x のみの形に変形すれば良かったことを確認することで、文字が2つ以上になっても等式で表された関係を目的に応じて変形すればよいことに気付かせる。				○

6. 本時

(1) ねらい

文字を有効的に使うことにより、数の性質を一般的に説明することができる。

(2) 授業改善の視点

例題を提示することを通して、自分だけで考えるのではなく、グループで考え、発表し合う言語活動は、文字のよさに気づき、数の性質を一般的に説明することに有効であろう。

(3) 準備

豆確認問題 学習ワークシート カレンダー 模造紙

(4) 展開

学習活動 ・予想される生徒の反応(*)	時間	指導形態	指導上の留意点及び支援・評価 ◎努力を要する児童生徒への支援 ◇評価
1. 学習課題の把握 ・既習事項の豆確認問題を解く。 ・本時のめあてと学習の流れを確認する。 本時のめあて 文字を有効に使うことにより、数の性質を一般的に説明することができる。	5分	一斉	・既習事項を今日の授業で使うことを伝える。 ・本時のめあてをただ言うだけではなく、生徒に分かりやすいようにかみ砕いて説明する。 ・今日は教科書は使わないことを伝える。
2. 課題を追求する。 ○カレンダーを見て数字の規則を発見し、説明する。 ・連続する2つの整数についてみんなで考える。 ・規則を予想する。 *奇数になる。 わからない。 ・説明を聞き写す。(まねる。) ○別の規則を一人一人探して説明する。 ・一人で考える。	15分	一斉 個別	・予想をみんなで考えさせる。 ・説明の形式をまねることができるように模造紙を提示する。 ・しっかり考える時間を確保する。 ◎規則が発見できない生徒は、連続する

<ul style="list-style-type: none"> ・班で考える。(できる。) ・今日のためあてをもう一度確認する。 ○発表する。(わかる。) ・発表を聞いている生徒が説明をする。 ○規則がないかをみんなで考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・規則に気がついた生徒が発表する。 ・学習ワークシートを提出する。 	28分	<p>3つの場合を考えるように助言する。(T 2の先生が机間支援をしながら伝える)</p> <p>グループ ◎説明の書き方がわからない生徒には、黒板の例題を写しながら解くと良いことを助言する。(T 2の先生が机間支援をしながら伝える)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考えられた生徒は、たくさん見つけられるように指示を出す。 <p>一斉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・めあてを再確認させる。 ・いろいろな発表になるように意図的にT 2の先生に机間支援しながら発表者をチェックしておいてもらう。 ・発表をする人の話をしっかり聞いているかをチェックする。 ・発表を聞いている生徒に同じように説明させることで、理解しているかを把握する。また、発表をさせることで自信を持たせる。 <p>◇評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事象を数学的な推論の方法を用いて論理的に考察し、表現したり、その過程を振り返って考えを深めたりするなど、数学的な見方や考え方が身に付いている。 <p>【数学的な技能】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・規則が気づけない場合は、教師が質問しながら、気付かせまとめさせる。
<p>3. 本時のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習を振りかえる。 ・次時の中間テストの連絡を聞く。 	2分	<p>一斉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・達成度を確認しながら、学習の流れを振り返らせる。 ・次時は中間テストなのでしっかり学習をするように伝える。

7. 板書計画

<p>5/26 P. 29</p> <p>めあて</p> <p>連続する2つの整数を考える</p> <p>カレンダーを提示</p> <p>模造紙で提示</p> <p>予想…</p> <p>説明</p>	<p>班の発表</p>
--	-------------

8. 手立ての工夫に伴う生徒の変容

- 1) 「まねる」「できる」「わかる」で生徒がどう変容していったか。
- ・「まねる」→連続する二つの整数において自分の頭に浮かんだ二つの数について考えることによって、予想を付けやすくなった。そして、多くの生徒が予想することができた。
 - ・「できる」→班で考えることによって一人で浮かばない考えをみんなで吟味することができた。考えが浮かばない生徒には、連続する二つの整数の考え方を参考にしながら進めることができた。また、自分の考えを説明することによって自分の考えに自信を持つこと

ができた。

・「わかる」→自分の考えを発表することによって自分の答えに自信を持つことができた。また、発表をしっかりと聴くことにより他人の考え方を知ることができたり、色々な考え方を自分で説明する力を身につけることができた。

2) 「めあて」の設定において、生徒からの自発的な設定をどう誘発しようとしたか。

・本時では、めあてを設定するときに前時からのつながりを考え、文字を使うよさを本時の活動に取り入れようとするように発問し、生徒の中からつぶやきをひろうことで、しっかりと取り組ませることができた。

3) 「振り返り」で授業前と授業後と比較し、どのような変容が見られたか。

・色々な考えに興味を持ち、自分で文字を使って調べようとする生徒が増えた。また、他人に自分の考え方を説明することによって答えに自信が持てたり、しっかりと説明する力を身に付けることができた。

9. 授業の反省

身の回りにあるカレンダーを例にしたことで生徒が取り組みやすい内容になった。そのことで、本時のねらいにしっかりと迫ることができた。

自分で考えたり、班で考えたりする時間を作ったことで、しっかりと考えることができたり、他人の意見を参考に色々な考えを知ることができ、意欲的に取り組む生徒が多かった。

まとめの場面では、色々な考え方がでてきた中で、すべての答えを発表してクラスで確認することができなかった。模範解答や発表の仕方を工夫する必要がある。

教師の発言が多かった。もっと生徒の声やつぶやきをひろい、生徒主体の展開にするべきであった。そのためには、生徒の反応をしっかりと事前に考え準備をしておくべきであった。生徒が活動をする時間しっかりと作ったり、生徒の発表の場面で定着につながるようなルールや確認の仕方を普段の授業の中で積み重ねていくことの大切さを知ることができた。

10. 成果◎と課題●

◎まねることによってできる生徒の割合が増えた。また、最後までしっかりと考えようとする生徒も増えた。

◎まねることの場面や発表の場面でクラスの中でルールや約束をしっかりとできたことで集中して取り組む生徒が増えた。

●1時間1時間の授業では、わかる生徒の割合や意欲的に授業に取り組む生徒が増えたように感じるが、時間が経つことにより忘れてしまい、復習問題をする場面や、その考えを使おうとする場面で活用することができない生徒が多くしっかりと定着につながっていないと思われるので、今後は改善をしていく必要がある。

●少人数で行う授業と一斉で行う授業を効果的におこなうことで、クラス全員に対しての細かな指導につなげ定着につなげていきたい。また、クラス分けの際も、生徒1人1人が希望したクラスだけでなく、習熟度をしっかりと教員が読みとりクラスを分けることでさらに効果的になると考える。



理科学習指導案

平成28年11月4日(金) 第5校時 2年2組 第二理科室 指導者 吉田 旬

1. 単元名 電気の世界
小単元名 電流と電圧

2. 考察

(1) 教材観

①学習内容：学習指導要領上の位置づけ

第一分野 (3) ア 電流

(ア) 回路と電流・電圧

- ・回路をつくり、回路の電流や電圧を測定する実験を行い、回路の各点を流れる電流や各部に加わる電圧についての規則性を見出すこと。

(イ) 電流・電圧と抵抗

- ・金属線に加わる電圧と電流を測定する実験を行い、電圧と電流の関係を見いだすとともに金属線には電気抵抗がある事を見出すこと。

(ウ) 電気とそのエネルギー

- ・電流によって熱や光などを発生させる実験を行い、電流から熱や光などが取り出せること及び電力の違いによって発生する熱や光などの量に違いがあることを見出すこと。

(エ) 静電気と電流

- ・異なる物質同士をこすり合わせると静電気が起こり、帯電した物体間では空間を隔てて力が働くこと及び静電気と電流は関係があること

②主な伸ばしたい資質・能力

- ・抵抗にかかる電圧を大きくしたときの電流の大きさを測る実験を行い、結果をグラフに書かせることで抵抗の値が変わると傾きが変わること、電圧と電流には比例の関係があることを理解させる。
- ・実験の役割分担を行うことにより、責任感と目的意識を持って意欲的に実験に参加することができるようにする。

③そのために必要な指導・学習活動

- ・効率的に実験を行うために、座っている場所で仕事を割り振り、準備や片付け、実験を行う。また、班員が一班6人と多いため、仕事を振ることで全ての班員を実験に参加させる。
- ・実験の誤差について扱い、グラフを作成する際に直線のグラフをかけるようにする。
- ・結果をグラフにすることで抵抗にかかる電圧の大きさと電流の値には比例の関係があることを見出す。

④今後の学習の活用

- ・私たちの身のまわりは電気製品であふれていることから、身近な電気製品である懐中電灯の明るさなどを例にして日常生活とのつながりを持たせる。
- ・電圧と電流の比例関係から、その仕組みや原理を理解できるようにする。

(2) 児童生徒の実態及び指導方針 (36名)

①既習の学習内容や活動

- ・小学校での既習事項 (第三学年：磁石の性質・電気の通り道 第四学年：電気の働き 第五学年：電流の働き 第六学年：電気の利用)
- ・並列回路及び直列回路における電流の関係
- ・並列回路及び直列回路における電圧の関係

②本単元に関わる児童生徒の実態

- ・本学級の生徒は、授業中の発言は消極的だが、理科の学習に対する意欲や態度は概ね良好であり、ほとんどの生徒が実験や観察に積極的に取り組むことができている。実験結果から、なぜそのような結果になるのかを思考・判断し、考察する場面は徐々に自分の言葉で科学的に表現できるようになってきたが、発表の場面では、発言まで至らない生徒が多い。
- ・また、グラフの作成に対して苦手意識を持つ生徒が多く、本単元においてグラフを書かせる際に苦手意識を取り除けるようにさせたい。

③指導方針

- ・生徒の実態から「自ら学び、表現し、考えを深める生徒の育成」の中の表現に着目して指導していきたい。一問一答など、明確な正解がある場合には多くの生徒が挙手を行えるが、自分の考えを発言する場面においては、明らかに挙手が減ってしまうことから、発問や指示を精選し、答えやすい発問を心がけると共に、的確に褒めることで、発言しやすい雰囲気を作り、自分の意見を表現できる生徒を育成する。
- ・グラフの描き方を最初から説明し、白紙の状態からでもグラフがかけるような生徒を育成する。

3. 校内研修との関わり

- ・本校の研修主題は「自ら学び表現し、考えを深める生徒の育成」である。また、そのための手立てとして、「まねる」「できる」「わかる」を意識した授業展開のパターン化が挙げられる。

まず、「まねる」としては、本時のめあてを知るとともに、仮説を立てたり検証したりするための実験や観察の方法を理解することである。すなわち、本時における学習の手段、方法、検証方法、科学的な解釈の仕方、概念、原理等を知ることである。

次に、「できる」としては、一斉・グループ・個々の学習活動を行い、正しい手順で観察実験を行うことで、正しい実験結果を得ることや、基礎的な問題を解けるようになることである。

「わかる」としては、既知の知識や授業での「できる」までの段階で知り得た情報や知識、観察実験の結果から、自分の言葉で説明できたり、考察できたり、まとめたり、日常生活とリンクさせて考えたりすることである。指導面においても複雑な指示内容になるため、視覚情報を活用するなどして、次の学習につなげていきたい。

以上のような学習活動を設定していくことで、生徒一人一人の主体的な学習活動を育み、「自ら学び表現し、考えを深める生徒の育成」ができるものと考えている。

4. 単元の目標

○さまざまな回路における電流、電圧を測定する実験を行い、電流の関係性、電圧の関係性を理解した上で、電流の大きさは電圧に比例することを見いだす。また、オームの法則から日常生活で使用している電気製品に流れる電流や電圧などにも目を向かせ、関連性を見出させる。

5. 評価規準

自然事象への感心・意欲・態度	科学的な思考	観察実験の技能・表現	自然事象についての知識・理解
電流に関心を持ち、意欲的に観察実験を行ったり、日常生活と関連づけて考察したりしようとする。	電流に関する事物、現象からその特徴を調べる方法を考え、観察実験を行ったり、電流における規則性を見いだしたりすることができる。	電流に関する観察・実験を行い、基本操作や記録の仕方を身につけるとともに、記録からグラフを正しく作成したり、発表したりすることができる。	観察・実験を通して電流に関する事物・事象についての基本的な概念や原理を理解し、知識を身につけることができる。

6. 指導計画（全15時間予定）

時	ねらい・学習活動	指導上の留意点	評価の観点			
			関	思	技	知
2	・回路を流れる電流の向きについて理解する。 ・並列回路、直列回路の違いを理解し、回路図が書ける。	・発光ダイオードの特性を理解させ、電流の向きにつなげる。 ・電池の並列つなぎと直列つなぎから並列回路と直列回路の違いを見いださせる。	○			○
2	・回路図を見て回路を組むことができる。また、回路を見て回路図がかけられる。 ・電流、電圧の単位を知り、測定方法を理解する。	・できるようになった生徒を教師役として助言させる。その際、指示を出すだけとどめ、全員が自力で行えるようにする。 ・使い方とともに回路図をかかせ、以降の実験をスムーズに行えるようにする。			○	
2	・並列回路と直列回路における電流の値を正しく測る。 ・並列回路と直列回路における電流の関係を実験から見出す。	・電流計のマイナス端子の位置に注意させ、正しく実験を行わせる。 ・実験の誤差を考慮させ、実験の値から関係性を見いださせるようにする。		○	○	
2	・並列回路と直列回路における電圧の値を正しく測る。 ・並列回路と直列回路における電圧の関係を実験から見出す。	・電圧計のマイナス端子の位置に注意させ、正しく実験を行わせる。 ・水流モデルを用い、電圧の関係への理解を促す。		○	○	
1 本時	・電圧を変化させたときの電流の値を測定し、実験結果からグラフを書き、関係性を見出す。	・実験の誤差を考えさせ、グラフは直線で引くことを理解した上でグラフをかかせる。			○	
1	・オームの法則を実験結果から見だし、計算を行う。	・オームの法則を提示し、実験結果から成り立つことを確認させる。 ・練習問題をこなし、オームの法則になれる。		○		○
2	・実験から複数の抵抗があるときの回路全体の抵抗を測定する。 ・複数抵抗があるときの回路全体の抵抗が計算できるようになる。	・並列と直列に抵抗をつなぎ、回路全体の抵抗をオームの法則から計算させる。 ・練習問題を解き、並列や直列が合わさったものにも触れる。			○	○
3	・電気エネルギーや熱量、電力とは何かを理解する。 ・電熱線を用いた電力と水の温度上昇と時間の関係を調べる実験を行い、グラフから関係性を見出す。 ・熱量や電力量の概念を理解する。	・電力の計算や、単位について、練習問題を解く。 ・実験からグラフを作成する際には、誤差を考えさせ、直線か曲線かを選ばせてからグラフを引かせる。 ・ジュールとカロリーを扱い、両方計算で求められるようにする。		○		○

7. 本時

(1) ねらい

・電圧と電流との関係を調べる実験を行い、結果を表にまとめ、グラフにすることができる。

(2) 授業改善の視点

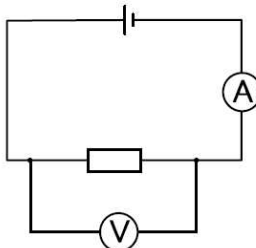
- ・グラフを書かせる際に、誤差と直線、曲線について考えさせることは、抵抗にかかる電圧の大きさと電流の大きさのグラフを正しく書くために有効であろう。
- ・実験の結果からグラフを作成し視覚的に電圧と電流の関係を考えさせることは、電圧

と電流の関係が比例の関係にあることを理解した上でグラフを書かせることは、誤差を考慮し直線のグラフを書かせるために有効であろう。

(3) 準備

- ・実験プリント
- ・実験装置
- ・グラフ用紙

(4) 展開

学習活動 予想される生徒の反応（＊）	時間	指導形態	指導上の留意点及び支援・評価 ◎努力を要する児童生徒への支援 ◇評価
既習事項の確認 ・並列回路と直列回路の電流、電圧の関係を確認する。 1. 本時のめあてを確認し、予想をたてる。	10分	一斉	・既習事項の確認はプリントを黒板に貼ることで行い、時間の短縮を図る。 ・予想を立てさせる際には、「電圧が大きくなると、電流も大きくなる」だけでなく、具体例を挙げるなど根拠のある予想が立てられるようにする。 ◎乾電池を直列につなぐと豆電球が明るくなることなどを考えさせる。
2. 実験の方法を確認し、回路図を元に回路を組み、電流を測定する。 【まねる】 <手順> 二つの抵抗を用いて電圧の値を変え、流れる電流の大きさを調べる。 抵抗 A … 10 Ω 抵抗 B … 20 Ω 測定する電圧の値 0 V ～ 5 V まで 1 V 刻みで測定する。 ・測定した値からグラフを書く。【できる】	20分	グループ	・実験を行う前に回路図を元に組み立ておく。  ・一班あたりの人数が多いため、記録係や目盛りを読む係、電源装置を動かす係など分担をすることで実験に積極的に参加させるようにする。 ・グラフを書く際には、実験の誤差を考え、直線で引かせる。 ◎電圧を大きくすれば電圧も大きくなることや、増え方に注目させ、比例のグラフをかかせるようにする。 ◇表に正しく数値を記入し、グラフを作成することができる。
3. 各班のグラフを黒板に貼り、直線のグラフからわかること、抵抗の値を変えると傾きが変わることを確認する。 ・実験レポートにグラフからわかったことを書き込み、考察を書く際の材料にする。	10分	一斉	・電圧を大きくすると電流も大きくなることに触れてから、グラフの形に着目させる。 ◎電圧を 2 倍、3 倍と増やしていくと電圧はどうなるのかを考えさせる。
4. 実験の考察を書く。【わかる】 ・早く書けた生徒の考察を実物投影機で映し、書けていない生徒の参考にさせる。	10分	個人	・考察の書き方を統一させ、今回の実験を振り返るとともに、実験からわかったことを理解させる。 ◎考察が進まない生徒は実物投影機で映った考察を参考にしながら書くように促す。 ◇考察の書き方に乗っ取り、実験からわかったことを自分の言葉で書くことができる。 （考察が書けた生徒からはんこを押し、実物投影機を見て書いた生徒と区別して評価する）

8. 板書計画

めあて	抵抗にかかる電圧を大きくしていくと流れる電流の大きさはどうなるだろうか	結果	結果の表
予想	生徒の予想		

各班のグラフ					
電圧と電流の関係を表したグラフ					

9. 授業の反省

学習指導要領には電流と電圧の関係のグラフを描き、グラフの形から比例関係を見出すと書いてあるが、生徒の実態から順序を逆にした。実験の結果から比例関係は見出すことができ、比例というヒントを元にグラフを作成させた。グラフはほとんどの生徒が書くことができた。しかし、グラフから見出す比例関係を先に見出してしまったため、結果からグラフの形が曲線か直線かを考えることもなくグラフの作成も簡単な物になってしまった。グラフを書かせることに重きを置きすぎて、ヒントを与えすぎてしまった。

10. 成果と課題

グラフに対する苦手意識を取り除くことができた。グラフの基本である①軸を決める②数値を考える③プロットするということを再確認することができた。しかし④プロットした値からグラフの形を考える、ことができなかった。①～④までを含めてグラフの作成であるにもかかわらず、ヒントを与えすぎてしまったことが課題である。

今回、学習指導要領の順番を変え、授業を行ったが物足りなさを感じる生徒が多かったのではないかと考えた。グラフから関係性を考えるという行程をなくし、正解がわかった上でグラフを書く授業を行ったので、上位層の生徒はやることがない時間ができてしまった。

社会科学学習指導案

平成28年5月26日(木) 第4校時 2年1組(2年1組教室) 指導者 須永 努

1. 単元名 2章 世界と比べた日本の地域的特色 1節 自然環境の特色

2. 考察

(1) 教材観

①学習内容：学習指導要領上の位置づけ及び単元内容

本単元は、学習指導要領に示された(3)「世界と比べて見た日本」の「ア 様々な面からとらえた日本」の中の「(ア) 自然環境から見た日本の地域的特色」を取り扱う。ここでは、日本の地域的特色を、地形、気候、災害などの自然環境の面から世界と比較・関連付けて学習していく。世界的視野から日本を1つの地域としてとらえることと、大まかな日本国内の地域差を追求することによって、国土の特色を理解させていく。

世界的視野から日本の自然環境を見ると、次のようなことがわかる。1つ目は、世界的には大地が不安定な地域、安定している地域とある中で、我が国日本は環太平洋造山帯に属し、地震や火山の多い不安定な大地上に位置している。2つ目は、世界を気候や植生に着目して見ると、熱帯から寒帯、砂漠から森林に覆われた地域まで見られる。その中で日本は、温帯に属し、降水量も多く、森林、樹木が生長しやすい環境にある。しかし、同じ温帯でも地形や季節風、海流などによってそれぞれ違った地域的特色が見られる。3つ目は、世界には海にまったく面しない内陸国や島国があるが、日本の国土は海に囲まれた島国であり、近海は大陸棚が広がり、寒流、暖流が流れる世界的な漁場となっている。4つ目は、これらの特色のある国土であるため、様々な自然災害が起こりうる。

②主な伸ばしたい資質・能力

- ・この単元では、分布図、雨温図、写真、地形図、グラフなどの多種多様な資料に触れることになる。資料の読み取りの過程の中で、課題や目的に応じて資料を読み取る力の育成を図る。
- ・資料から読み取ったことを基に、地域間を比較したり、既習事項と関連付けたりすることで、地理的に考察する力の育成を図る。
- ・近年、東日本大震災や熊本大分地震、大きな台風の影響による豪雨、土砂災害など、大きな自然災害が発生したため、それらを取り上げることで防災への関心を高める。しかし、福島から避難してきている生徒が1名いるため配慮したものにする。

以上のことから、本単元では世界的視野から見た日本の地域的特色と日本全体の視野から見た国内の諸地域の特色を追求し、我が国の国土の特色を大観させるとともに、地域の規模に応じて、また、地域間を比較し関連付けて、地域的特色を明らかにする視点や方法を身につけさせる。

③そのために必要な指導・学習活動

○世界と比較し日本の特色を見いだしていく。

・第1に世界の山地と比較し日本の山地の特色と山地のと資料の読み取りでは、見る視点を与え、ポイントを絞って見取らせる。そのとき、クラスの実態や生徒の実態に応じてペア学習やグループ学習を取り入れていく。

・第2に世界と日本の河川の比較をし、日本の河川の特色を見だし、その河川が作り上げる様々な地形をおさえていく。河川の特色を見いだす際は、長さやその傾斜に注目してとらえられるようにしたい。

・第3に島国である日本に見られる様々な海岸について、その利用方法に着目して変化に富んだ日本の海岸をとらえさせたい。また、日本近海には4つの海流が入り組んでおり、好漁場となっていることも一緒にとらえていく。

・第4に世界の気候と日本の気候を雨温図を使いとの特色をとらえていく。日本は地域によって違いがあることを既習事項と結びつけたり、季節によって違いがある季節風の影響であることを調べていく。

・最後に、変化に富んだ日本列島では、様々な自然災害が起こることを理解し、防災についても考えさせていきたい。

④ 今後の学習の活用

・本単元は、この後学習する「世界と日本の人口」、「世界と日本資源と産業」、「世界と日本の地域間の結びつき」とも関連が深い。本単元で日本の地形や気候の特色をつかむことにより、今後の学習でそれらと人口や資源・産業などを結びつけて考えることができるようにする。

(2) 生徒の実態及び指導方針 (36名)

①既習の学習内容や活動

- ・小学校5年生において地理的学習「わたしたちの国土と環境」を学習している。
- ・中学校1年生では、『世界と日本の地域構成』として「地球のすがた」「世界のすがたとさまざまな地域」「日本のすがたとさまざまな地域」を学習した。『地域の規模に応じた調査』では、「身近な地域の調査」「都道府県の調査」を行っている。
- ・前単元では、「日本の姿」を位置、時差、範囲(排他的経済水域)、都道府県の面でとらえ、日本の姿を外国の人に説明するという活動をしてきた。日本の姿を多面的多角的にとらえてきた。

②本単元に関わる児童生徒の実態

本学級の生徒は、日頃からグループ活動をメインに学級経営を行っており、グループで話し合い活動を活発に行える。また、グラフや資料を読みとることを1学年のときから数多く取り入れているため、資料読み取りに対して積極的に取り組める生徒が多い。さらに、自分が感じたことや自分の意見を書くことも抵抗なくできる生徒が多い。ただ、グラフや資料を作る作業を行うと作成するスピード差が大きい。

③指導方針

- ・多種多様な資料を扱うときには、全体で見方や読み方を確認し個人の活動に入るようにする。生徒がその資料のとらえさせたいポイントを絞るとともに1単位時間であまり多くの資料を用いないようにする。
- ・丁寧に資料を読みとり、資料を根拠にした展開をすることで、知識に偏らないようにする。
- ・ICTを活用し、写真や資料を拡大、カラー表示し、全体で確認したいことができるようにする。
- ・着色する作業やグラフの作成では、長時間の作業にならないように、ポイントを絞って作業させたり、グループで協力したりしていき、時間差が生じないように配慮していく。
- ・自らが作った資料を使うことで、学習への関心を高められるようにしていく。
- ・話し合いをする際には、自分の意見を持ち、比較できるように、個人で考える時間を確保する。
- ・意見を出す場面では、考えるヒントや見るポイントを用意し、資料をもとに考えを導き出せるようにしていく。
- ・実際の模型を使っていくことで、視覚的に、違いが起こる原因ををとらえられるようにする。

3. 単元(題材)の目標

- ・世界の地理的事象と比較することにより、日本の地形や気候、それによっておこる自然災害について学び、日本の自然環境の特色を理解することができる。

4. 評価規準

関心・意欲・態度、思考・判断・表現、技能、知識・理解	観 点
・世界的視野からみた日本の地域的特色や、日本全体の視野からみたおおまかな国内の地域差に関心をもち、それらを意欲的に追究し、捉えようとする。	関心意欲態度
・世界と比べた日本の地域的特色を、「自然環境」「人口」「資源・エネルギーと産業」「地域間の結びつき」の観点をもとに多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	思考判断表現
・世界と比べた日本の地域的特色に関するさまざまな資料から、有用な情報を適切に選択し、その情報から日本の地域的特色について読み取ったり、図表にまとめたりすることができる。	技能
・世界と比べた日本の地域的特色について、世界的視野や日本全体の視野から見た「自然環境」「人口」「資源・エネルギーと産業」「地域間の結びつき」を理解し、その知識を身につけている。	知識・理解

5. 指導計画 (全7時間予定)

学習過程	時	○ねらい ・学習活動	指導上の留意点	評価の観点			
				関	思	技	知
1 世界と比べた日本の山地	1	○なぜ日本には火山と地震が多いのだろう。 ・世界の造山帯の地図から日本の所属する造山帯を読み取る。 ・地震と火山の分布図からわかることを読み取る。	・ICTを使い、地震と火山の分布図を重ね合わせ、視覚的に一致していることを理解しやすいようにする。		○		
2 世界と比べた日本の平野	1	○世界と比べて、日本の平野と川の特徴を説明しよう。 ・「世界と日本の河川の比較」の資料をもとに、日本の河川の特徴を読み取る。 ・河川がつくる平野やその他の地形について知る。	・世界と日本の河川を比較するときに、見取るポイントがわからない生徒には、見取るポイントを示す。		○		
3 日本の海岸と海流	1	○日本に見られる海岸の利用方法と日本付近の海流を理解しよう。 ・グループで海岸の利用方法を話し合う。	・日本に見られる様々な海岸を示し、グループで利用方法を話し合うことで、多様な利用方法について理解を深めることができるようにする。				○
4 世界の気候の特色	1	○世界に見られる5つの気候帯の違いは何だろう。 ・雨温図、景観写真を読み取り、5つの気候帯の特色をとらえる。	・教科書の雨温図では、気温と降水量について、高い(多い)月やその差についてみるよう助言することで特色をとらえやすくする。 ・景観写真図では、動植物について見取らせることで、気候の特色をとらえやすくする。 ・一覧表をつくることで、5つの気候区分を比較しやすくする。		○		
5 日本の気候の特色①	1	○温帯に属する日本の中で地域差があることを理解しよう。 ・気温と降水量の表をもとに雨温図をつくる。 ・作成した雨温図をもとにそれぞれに見られる特徴をまとめる。	・日本の6つの雨温図を作成し、一覧表にまとめることで地域差があることを理解できるようにする。 ・世界の気候の雨温図を見取るポイントと同じことを伝えることで、前時の活動を生かし、日本の気候にも地域差があることを理解しやすくする。			○	○
5 日本の気候の特色②	1 本時	○なぜ温帯に属する4つの都市の気候に違いがあるのか考えよう。 ・資料や実験をもとに気候の違いについて考える。	・既習事項の日本の75%が山地であることや季節風の資料を提示することで、気候の違いに気づけるようにする。 ・模型を使った実験をすることで視覚的に違いが起こる原因をとらえられるようにする。		○		
6 日本の様々な自然災害	1	○なぜ日本は様々な自然災害が起こるのだろう。 ・地形や気候との関わりに着目し、自然災害が起こることを理解する。	・既習事項の地形や気候と関わり合わせて考えることで、多様な自然災害が起こることを理解できるようにする。				○

6. 本時

(1) ねらい

- ・温帯に属する日本の気候の中で、地域によって違いがあるか考えることができる。

(2) 授業改善の視点

- ・模型を使って実際に冬と夏の状況を実験することは、地域のよって違いがあることを考えるのに有効であろう。
- ・調べたことをまとめるときに、「まとめる基本の形」にあてはめてまとめることは、地域ごとの気候の特色を理解するのに有効であろう。

(3) 準備

- ・教師・・・日本列島模型、うちわ(季節風)、細かく切った紙(降水量)、ワークシート、PC、TV

(4) 展開

<p>学習活動 ・予想される生徒の反応(*)</p>	<p>時間</p>	<p>指導 形態</p>	<p>指導上の留意点及び支援・評価 ◎努力を要する児童生徒への支援 ◇評価</p>
<p>1. 課題をつかむ。 ○前時までの学習を振り返る。 ・日本の地形の75%は山地である。 ・日本の気候は大きく3つに区分できる。 ・温帯に属する4つの都市の気候が異なっている。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>本時のめあて なぜ温帯に属する4つの都市の気候に違いがあるのか考えよう。</p> </div>	<p>5分</p>	<p>一斉</p>	<p>・4つの都市の同じ月の景観写真を見せ、その違いに気づけるようにする。</p>
<p>2. 予想を立てる。 ○気候が異なる原因となりそうなものを予想しよう。 *地形、季節風、標高差、海流、緯度など</p>	<p>3分</p>	<p>一斉</p>	
<p>3. 温帯に属する4つの都市の気候に地域差が生じる原因を調べたり考えたりする。 ○模型を使い、地域差がおこる原因をとらえる。(まねる) *予想されるキーワード 山地、海流(暖流、寒流)、季節風 山に囲まれた地形</p>	<p>30分</p>	<p>一斉</p>	<p>・教室の中央に模型を置き、どの角度からでも見えるよう配慮する。 ・その原因となるキーワードをメモをとらせながら行う。</p>
<p>○実験をもとに、個人、グループで調べる。 *地理的条件や地形とを関連づけてまとめている。(できる)</p> <p>内陸の気候→気温下がる 降水量少ない 太平洋側の気候→気温上がる降水量夏多い 日本海側の気候→降水量冬多い 瀬戸内の気候→降水量少ない</p>	<p>個人 グループ</p>		<p>・個人で調べる時間を十分確保することで自分の意見をもつことができるようにする。 ・調べてわかったことだけでなく、それを元に考えたことや推測したことも含めてまとめるよう伝える。 ◎予想で出てきたことを参考にさせ、気候に影響を与えそうなものを考えさせ、そこから原因を考えるように助言する。</p>

<p>4. 温帯に属する4つの都市の気候に地域差が生じる原因をまとめる。 (まねる) (わかる)</p>	<p>10分</p>	<p>・「まとめる基本の形」を提示し、調べたことをあてはめることで、誰でも学習したことが確認できるようにする。 ◇実験や雨温図、調べたことをもとに、地域差が生じることをまとめている。【思考判断表現】</p>
<p>5. 振り返りを行う ○次時に出す問題を作成する。</p>	<p>2分</p>	<p>・本時で学習した内容から、次時にクラスメイトに出す問題を作成する。 ◎本時のめあてにそった問題を作成するよう助言する。</p>

7. 板書計画

<p>めあて：なぜ温帯に属する4つの都市の気候に違いがあるのか考えよう。</p> <p>○前時まででわかっていること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の地形の75%は山地である。 ・日本の気候は大きく3つに区分できる。 <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・温帯に属する4つの都市の気候が異なっている。 <p>予想してみよう！ 地形、季節風、標高差、海流、緯度・・・</p> <p>調べた結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ・ ・ ・ 	<p>日本列島の地図</p> <p>海流と季節風、地形が要因となることがわかる内容にしていく。</p>
--	---

8. 手立ての工夫に伴う生徒の変容

- 1) 「まねる」「できる」「わかる」で生徒がどう変容していったか。
 - ・「まねる」→模型を使い、目で見えてわかるように実験したことで、言葉だけの説明より、多くの生徒が要因をとらえることができた。実験後、生徒は多くのキーワードをあげることができた。
 - 要因をまとめるときに、「まとめる基本の形」を示したことで、低位の生徒も気候の特色とその要因をまとめることができた。
 - ・「できる」→キーワードを使い、気候がそれぞれ違う要因を導き出せていた。
 - ・「わかる」→「まとめる基本の形」を示したことで、まとめることができたが、その後の振り返りの図に的確に記入することができた。
- 2) 「めあて」の設定において、生徒からの自発的な設定をどう誘発しようとしたか。
 - ・本時では、めあてを設定するときに前時までの学習を振り返った。前時に4つの雨温図を作ったことで、違いを目で見えて分かるものにした。そのため、「なぜ、同じ温帯で雨温図が違うのか？」と生徒が疑問をもつことができた。
- 3) 「振り返り」で授業前と授業後と比較し、どのような変容が見られたか。
 - ・南北に長い日本列島において、暖流、寒流、夏と冬の季節風、そして日本の山がち地形により、気候に違いが見られることを理解できた。振り返りは2パターン用意した。図に埋め込むものへはすんなりと記入できた。もう一つは、次時に出す問題を作らせた。時間が足りなかったが、本時を理解できた生徒の多くが問題を作成できた。

9. 授業の反省

違いが出る要因となりそうものを予想させることは、本時の学習意欲を持続させる上でも重要な活動である。生徒が予想したときに、「なぜ、そう思う？」と理由を言わせることで、生徒の思考をさらに引き出すことができる。突っ込んで聞けなかったために、その予想から広がりを見せることができなかった。また、まとめるときに、どこまで細かく表現するのかがあいまいであったため、生徒が自信をもってまとめることができなかった。

10. 成果◎と課題●

◎本時に学ぶ気候の違いは、世界中でも同じような要因があれば起こりうるものであり、今後、日本の各地の学習でも必要な知識である。そこが、確実に押さえられたことは大きい成果である。

◎模型を使ったことで、目で見えてわかりやすく、要因がとらえやすかった。そのことで、本時のねらいに迫ることができた。

●高松と長野の気温差について、実験やキーワードだけではわかりづらく、要因があいまいになってしまった。標高についても説明を加えるべきであった。

●グループ学習において、意見交換のルールを作っておく方がスムーズにでき、学び合いがしっかりできる。



英語科学習指導案（1年3組）

平成28年11月1日（火）第2校時

1年3組教室 指導者 伊藤真江

A L T Ai Nannichi

支援員 矢坂 さえ子

1. 単元名 Unit8 イギリスの本

2. 考察

(1) 教材観

①学習指導要領上の位置づけ

本題材は、中学校学習指導要領 第2章 外国語
第2各言語の目標及び内容等

1 目標 (1) 英語を聞くことになれ親しみ、初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。

(2) 英語で話すことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて、自分の考えなどを話すことができるようにする。

2 内容 (1) 言語活動

ア聞くこと (ウ) 質問や依頼を聞いて適切に応じること

(イ) 自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。

(3) 言語材料

エ文法事項 (ア)文

d 疑問文のうち動詞で始まるもの、助動詞 (can, do, may など) で始まるもの、or を含むもの及び疑問詞 (how, what, when, where, which, who, whose, why) ではじまるもの

(ウ)代名詞

a 人称, 指示, 疑問, 数量を表すものの習熟を目指して構成されたものである。

②主な伸ばしたい資質・能力

具体的な文法事項としては、(3) 言語材料エー(ア) dのうち、where whose で始まる疑問文と、(ウ)aのうち人称代名詞の目的格また、mine/yoursなどの所有目的格を取り扱う。これらを学習することで、どこに何があるという質問やこれは誰のものかという質問ができるようになり、より会話の幅が増え、さらに積極的にコミュニケーションができるようになる。また、mine yoursなどの言い方を使うことで、より端的な表現を使えるようになる一方で、～'sという答え方もあるため、たとえば、Whose book is that?に対する答えとして、yours / your book / Aki's / Aki's book というように表現の幅がひろがることにより、下位郡の生徒にとっては混乱につながることも予想される。そのため、指導の際には注意が必要である。

③そのために必要な指導・学習活動

たとえば、『Where is my dictionary?』と質問された場合、場所を答えるためには、場所を表す前置詞 (in / on / under / by / near) の理解がなければ、答えることができない。そのため、既習言語であっても、もう一度復習が必要である。復習をし、前置詞の意味を理解したうえで、新出言語活動をおこなう。where / whose を扱う学習活動としては、身の回りのことをたずねあう活動をするのにてきた教材である。実際に自分のもの、また、友達を持ち物を扱い、答えることにより、英語での学習活動としてよくおこなわれる場面設定を用意したうえでの学習活動 (空港での会話設定、道案内という場面設定のような学習活動) により、身近に感じ理解しやすいと思われる。

④今後の学習の活用

本題材では、インターネット電話を利用して、海外にいる知り合いの人と英語で対話をする設定である。こうした方法を取ることで、世界中とコミュニケーションがとれるということを生徒は知る。今後、総合の学習等で発展していけると考えられる。また、Winnie-the-pooh, The Tale of Peter Rabbitなどイギリスの文学作品が取り上げられている。これは、Book2 Unit2で取り上げる Harry Potter の映画の舞台へ、実際に旅行に行くという題材でも関連付けることができる。

(2) 児童生徒の実態及び指導方針 (男子13名 女子14名 計28名)

①既習の学習内容や活動

1学期で、be動詞、一般動詞の平叙文・疑問文・否定文、そして、命令文の学習をしてきた。また、数を尋ねる疑問文として、疑問視+疑問文の学習をし、疑問詞に続く文は疑問文あるというとは学習済みである。2学期は、今後続く学習のために、既習言語材料をもちいて、自分のことを表現する活動を行ってきた。ペアワークで、be動詞を用いた文、be動詞の疑問文・否定文など、系統ごとにそれぞれ、自分のことについての文や、質問する文を作る活動を行っている。

②本単元に関わる生徒の実態

〈コミュニケーションに対する関心・意欲・態度〉

全体的に元気がよく、男女とも発問に対して挙手・発言しようとしている。授業の始めのあいさつや、曜日、日付、天気などを確認する質問にも、大きな声で答えている。また、授業中のペアワークでも、男女とも積極的に話しかけ、質問したり答えたりしようとする姿勢が見られる。また、質問があれば、積極的にALTに質問をしたり、英語で会話をしようとしたり姿がみられる。一方で、道具を忘れてたり宿題を忘れてりする生徒もいるが、コミュニケーション活動に関しては、熱心に取り組もうとする様子が見られる。

〈表現の能力〉

書くことに関しては、負担に感じることなく取り組み、短時間で書き上げようとする姿が見られる。しかし、モデル文の中で与えられた文を真似て書くということで満足を感じ、オリジナルの内容を書き上げようとしたり、発展した内容に仕上げようとしたりする生徒は少ない。

〈理解の能力〉

英語での指示や、説明にたいしてほとんどの生徒が理解し、答えたり、指示にしたがったりすることができている。教科書の内容の確認に関しても、生徒の発言により、わからない生徒が理解するなど生徒の積極的な発言により、うまく理解をうながしている。

〈言語文化に関する知識・理解〉

授業の warm-up として、フラッシュカードを使い、新出単語を繰り返し、覚える活動をしている。ほとんどの生徒が、大きな声で、活動に取り組んでおり、英語→英語、日本語→英語をいうことができている。直近に学習したフォニックスでは、2文字で1つの音(子音)をあらわす綴りを9つのパターンの中から、ほとんどの生徒が音を聞いて、答えることができた。しかし、書くことに関しては、単語テストの8割を正解できる生徒が、学級の半数くらいにとどまっている以上ことから、音を聞いて、単語の意味を理解することはできるが、書くことが苦手な生徒が多い。

③指導方針

- 言語材料の定着をはかるために、単元を通しフラッシュカードを用いて新出言語材料のドリル練習を行う。
- フラッシュカードを用いたドリル練習では、複数の教員で分担し、テンポをもって練習できるようにする。
- 疑問詞 **where** の学習時には、未習の前置詞に関して、絵を用いたり、例を挙げて示したりすることにより、日本語を介さずイメージとしてとらえられるようにする。
- 未習の前置詞を取り入れることにより、言語活動でより多くの表現ができるようにする。
- 疑問詞 **where/whose** では、自分の道具を用いて質問しあい、身近な題材で使うことにより日常生活でも使えるようにする。
- 人称代名詞目的格学習の際には、他己紹介を取り入れ三単現 **S** の学習をスパイラルにできるようにする。また、ALTに質問したり、紹介したりする **speaking test** を取り入れ、会話力の強化も図る。
- 教科書本文理解ではワークシートを用い、日本語での質問、英語での質問を作る事により、下位郡・上位群のレベルに合わせて取り組めるようにする。またその際には、教員が個別に答え合わせし、生徒に達成感を味わわせる。

(3) 校内研修との関わり

「まねる」ことを基本とした授業展開をし、スモールステップを踏みながら徐々にレベルアップした活動を行うことにより、「できる」につながると考えることから、まずは基本本文の口頭練習をたくさん行っていく。本単元においては、疑問詞 **where** と **whose** を用いた疑問文とその答えを扱うことから、**where** では、主語を変えた文、答え方の文では、同じ前置詞を用いた文から、徐々に前置詞を変えていくといったようなスモールステップで、口頭練習やライティングの練習を行っていく。また、もう一つ新出言語材料である人称代名詞の目的格においては、既習事項で既に作文した家族の自己紹介を真似させるところからはじめ、徐々に動詞を変えていくなどし、内容を考えた文の流れで、ALT に好きな人物の紹介につなげていく。以上のように文を言えることが「できる」、書くことが「できる」という事から、**where** の使い方前置詞の使い方、物の場所を問う表現の使い方が「わかる」と考える。

3. 単元の目標

登場人物の会話を読み取るとともに、**where/whose** を用いた疑問文とその答え方を正しく使って、誰のものか尋ねたり、友達のものがあるか質問しあったりできるようにする。また人称代名詞目的格の用法や既習の文法を使って自己紹介ができるようにする。

4. 評価規準

- (関) ○ **where/whose** を用いた言語活動に積極的に取り組んでいる。
 ○ 自己紹介で、文章の内容に注意しながら、自然な流れになるように書こうとしている。
- (表) ○ **where/whose** を用いて、質問したり答えたりすることができる。
 ○ 自己紹介で、紹介する文を英語で書いたり話したりすることができる。
- (理) ○ 本文の内容を理解している。
 ○ **where/whose** を用いた文やその答えを聞いたり読んだりして、その内容を理解することができる。
- (言) ○ **where/whose** を使った疑問文や答え方、代名詞の目的格を正しく使って文章を書くことができる。

5. 指導計画 (全8時間予定 本時は1時間目)

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点			
			関	表	理	言
1 (本時)	○場所を表す際に必要な前置詞の復習(in)と未習の前置詞(on / under / near/by)を知る。 ○whereを使った文と、その応答を理解し、表現する。 ○whereを使った文とその応答の言語活動	・未習の前置詞に関して、絵を用いたり、例を挙げて示したりすることにより、日本語を介さずイメージとしてとらえられるようにする。 ・未習の前置詞を取り入れることにより、言語活動でより多くの表現ができるようにする。	○	○		○
1	○新出単語練習 ○前時の復習 ○Part1の内容理解	・本単元の新出単語を一度にすべて扱い、本文理解の度に全部を扱うことにより新出単語の定着を図る。 ・復習に、ドリル活動を取り入れ、新出言語材料の定着を図る。 ・PCを用いて、理解しやすいようにする。 ・ワークシートを段階別や、発展問題を入れるなどし、下位郡だけでなく、上位群の生徒も飽きさせないようにする。			○	○
1	○whoseを使った疑問文と答え方の練習	・導入の段階で学年の教員のやALTの物を例に挙げるにより、Whoseの意味や用法を理解しやすくする。	○	○		
1	○新出単語練習	・mine / yours / ○○'sの言い方に気を付けない			○	

	○Part2の内容理解	がら読ませたり、生徒の持ち物を使い、練習させたりし、意味や使い方に注意させる。				
1	○be動詞の文と、三単現の文の復習のドリル練習 ○人称代名詞の目的格の意味を理解と言語活動	・復習のドリル練習をすることにより、人称代名詞目的格の言語活動を行う際に、自然な流れで会話ができるようにする。	○	○		
1	○新出単語練習 ○Part3の内容理解 ○speaking testにむけての練習をする。	・Unit6で書いた家族の紹介文を思い出させ、内容の関連に注意させ、自然な流れで紹介できるようにする。		○	○	
1	○単語テスト ○speaking test	・待っている間に課題を出し、無駄な時間を作らないようにする。			○	○

6. 本時

(1) ねらい where を使った疑問文の練習を通して、どこにあるかをたずねたり答えたりすることができる。

(2) 授業改善の視点

外国からきたお年寄りの手助けをしようという場面設定は、そのために必要となる言語材料を考えるという手立てに有効であろう。

(3) 準備 前置詞カード、前置詞を表現している写真、ワークシート、

(4) 展開

学習活動	時間	形態 指導	指導上の留意点及び支援・評価 ◎努力を要する児童生徒の支援 ◇評価
1. 教員の話聞き、今日どんな表現を学ばいいか考える。	5分	一斉	<ul style="list-style-type: none"> 総合の授業でのグランドゴルフ大会を例に出し、お年寄りの手助けから、外国のお年寄りにもお手伝いができる子に育てほしいと伝える。そのためには、英語のどんな表現を知らなければならないかを、日本語英語問わず考えさせ、本時の学習内容について、生徒が自主的に考えられるようにする。 教員の思いや意図が明確に生徒に伝わるように日本語で説明する。
2. T1とT2の会話を聞き、Where is ~?の文の意味を理解する。	10分	一斉	<ul style="list-style-type: none"> T1が老人役をするなどT2との会話が場面設定と重なるように演技する。T1が見えている状態でWhere is my pen?と言うような導入はしないようにする。 やりとりの応答はすべてinを使い、inとのやりとりを繰り返した後、他の前置詞を使うような答えを用意し、問題提起をすることにより、他の前置詞を学ぶ必然性を感じさせる。
3. ピクチャーカードを見ながら、教師の質問に答える。	5分	一斉	<ul style="list-style-type: none"> 生徒のつまったところで前置詞を提示することにより、イメージで意味をとらえられるようにする。 前置詞カードと説明する写真を提示しな

4. ワークシートでドリル練習をする。	10分	個別	<p>がら説明し、どの前置詞なのか意識できるようにする。</p> <p>◎写真をカテゴライズしながら黒板に掲示することにより、下位郡の生徒が次の活動で、参考にしやすくする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・口頭練習をたくさんし、絵をみてフレーズが言えるようにする。 ・whereの意味・用法を確認し、確実な定着を図る。
5. ワークシートを使い、ペア活動をする。特定の物についての質問と、それについての場所を答える活動をする。	10分	ペア	<ul style="list-style-type: none"> ・インフォメーションギャップを質問し合い、whereの必然性を理解した上で、活動ができるようにする。 <p>◎問答ができない生徒には、近くで発音を教え、問答ができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒板に貼られた絵を答えにすることにより、未習の前置詞でも、答えられるようにする。 <p>◇whereを使い、どこにあるか質問したり、答えたりする文を作ることができる。【表現の能力】(観察・ワークシート)</p>
6. 活動で使った表現をワークシートに書く。	5分	個別	<p>◎モデル文を真似させ、1つ以上は書けるようにする。</p> <p>○たくさん書ける生徒は、たくさん書き、能力に応じた達成感が得られるようにする。</p>
7. 本時の振り返りをする。	5分	個別	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の振り返りを見て、何人かの生徒に発表をさせ、めあての達成を確認する。 <p>○質問ができた、できなかったという振り返りにならないように注意し、場所を聞くためには何を使うかなど、具体的な振り返りができるようにする。</p>

4. 板書計画

めあて場所をたずねたり答えたりするためには英語でなんと書けば良いか

in 写真 on 写真 under 写真 near 写真 by 写真

〈基本文〉
Is my pen under the textbook?

Where is my pen? It's under the textbook.

振り返り 場所をたずねる時にはwhereを使う。答えはIt's 前置詞+場所で答える。

8. 教員の手立ての工夫に伴う生徒の変容

1) ①まねる・・・口頭練習

前置詞カードと写真を見ながらドリル練習をした。同じ前置詞を用いての練習としたため、最初は上位群の生徒が答えを言い、だんだんと言える人数が増えていった。ほとんど全員の生徒が質問と答えの口頭練習ができた。

②できる・・・ワークシートやインフォメーションギャップ

口頭練習とたくさんしたので、ワークシートでの問題練習にはすらすら解くことができた。また、インフォメーションギャップのペア活動では、疑問詞 **where** を用いて質問することができた。それに対する答えの文では、下位群の生徒でも、黒板の前置詞と写真を見ながら答えようとする姿が見られた。

③わかる・・・振り返り

振り返りでの質問に、ほとんどの生徒が、場所をたずねる時につかう疑問詞 **where** を答えることができた。

2) 「めあて」の設定において、自発的な設定をどのように誘発しようとしたか。

授業後に予定していた総合の授業でのグランドゴルフ大会の場面を設定したが、物を借りて来た職員室にいたが、ALT の先生しかいない。どうやって質問したらいいか。と言うように必然性のある場面を設定すれば良かった。今後の課題としていきたい。

3) 「振り返り」で授業前と授業後にどのような変容が見られたか。

場所をたずねる時には、疑問詞 **where** と場所を表す前置詞ということを確認にすることにより、場所を質問するには、**where** という疑問詞と前置詞という組み合わせが、生徒にインプットすることができた。

9. 授業の反省

自発的なねらいを設定するために、導入の場面設定において、必然性がある場面を設定すべきだった。「まねる」ステップでは、繰り返したくさんの口頭練習をしたので、ペア活動でほとんどの生徒が使えることができていた。「できる」ステップでは、ワークシートで、主語が複数の場合の **be** 動詞、また、答えに用いる代名詞を間違えてしまう生徒が多かった。そのため、生徒に付けたい力を明確にした上で、1 時間のスモールステップを考え、少し応用的言語材料は、発展問題として、終わった生徒が取り組めるようにするなどワークシートの作成をすべきであった。「振り返り」では、少し時間が足りなくなってしまったので、口頭で行ってしまった。前に述べた、ワークシートをポイントを絞った問題にし、ターゲットから外れないことで時間配分を考え、生徒一人ひとりが、自分の言葉で振り返りができるようにし、「まねる」「できる」そして「分かる」だから、もっと学びたいと言うようなスパイラルを作っていきたいと思った。また、必然性のある場面設定をすることで、『場所をたずねるときに疑問詞 **where** を使う。答える時には前置詞を使う』と言うように自分の言葉で答えられない生徒でも、具体的に質問と答えの文を作ることで、振り返りの幅も広がると思った。また、「まねる」「できる」「わかる」というスモールステップで授業を行うことにより、生徒も集中して学習できると思った。効率的に、ポイントを絞って授業できるように、教材研究もしていかなければならないと思う。

10. 成果と課題

- ◎ ALT との対話で、**where** とその答えを示し、何回か繰り返していくうちに生徒から疑問文や答えの文が出てきた。
- ◎ たくさん写真を使ったので、板書で時間が短縮できた。
- ◎ 口頭練習を繰り返し行ったので、場所をたずねる疑問詞 **where** を用いた疑問文は、ペア活動においてほとんどの生徒が使えることができていた。
- 導入の段階の場面設定で、もう少し分かりやすい場面設定、必然性がある場面を設定すれば良かった。また、導入の段階で、生徒からの質問の声を拾ってからねらいを提示しても良かった。
- 口頭練習で、少し時間を取り過ぎてしまった。繰り返し口頭練習ができ、ほとんどの生徒が口頭で言うことができたが、ペア活動で自分の言葉で質問したり、答えたりもさせたかったので、あまり時間を取り過ぎないようにする。
- たくさん写真を使ったので、その取り扱いに少し戸惑ってしまった。
- ワークシートで時間がかかってしまった。少し難しいものも入っていたので、口

頭練習に絡んだ内容にするなど、応用した内容をいれるより、口頭練習で自分が声に出したことがあって確認できるような内容にすれば良かった。ワークシートでのつまづきが予想されたため、導入で be 動詞の復習を取り入れたが、あまり成果がなかったように思われた。

- できる生徒用に、難易度別にワークシートを作成するなど時間をもてあそばないような工夫が必要。
- オールイングリッシュで、授業を進めているが、分からない生徒もいるので、分かった生徒に日本語で説明してもらったりなど、指示の仕方も工夫する。

技術科学学習指導案

日 時：平成28年 9 月15日（木）第2校時
年・組：第1学年3組
場 所：技術室
指導者：教諭 阿部幸太郎

1. 授業の視点

完成した製作品をお互いに評価し合ったことは、次のものづくりへの課題を考えることに有効であったか。

2. 単元名 「製作品の設計製作」

3. 授業構想の意図

本授業は、製作品の設計・製作におけるまとめの部分である。発表するにあたって、自己評価を行い、その後他者評価を行うことで、自分の気づかなかった点に気づき、次の作品への課題の改善につなげることができると考えられる。また、賞賛されることで、自信をもって作品の制作に取り組ませるようにする。

4. 指導目標

- ・材料の特徴と利用方法について知る。
- ・材料に適した加工法を知り、工具や機器を安全に使用できる。
- ・構想の表示方法を知り、製作図をかくことができる。
- ・部品加工、組立て及び仕上げができる。
- ・使用目的や使用条件に即した機能と構造について考える。

5. 評価規準

- ・省資源や使用者の安全などに配慮して設計・製作し、新しい発想を生み出し活用しようとしている。【関心・意欲・態度】
- ・製作品の使用目的や使用条件を明確にし、社会的、環境的及び経済的側面などから材料、使いやすさ及び丈夫さなどを比較・検討した上で、製作品やその構成部品の適切な形状と寸法などを決定している。【工夫・創造】
- ・製作図を基にして、材料取り、部品加工、組み立て・接合・仕上げができる。【技能】
- ・製作図の書き方や材料に適した切断、切削などの方法についての知識を身に付けている。【知識・理解】

6. 指導と評価の計画（全25時間 本時は24/25）

時間	学習活動	評価規準
1	材料の特徴と利用方法について知る。	【知識・理解】 木材、金属及びプラスチックなどの特徴と利用方法についての知識を身に付けている。（ワークシート）
8	材料に適した加工法を知り、工具や機器を安全に使用できる。	【技能】 切断、切削などに必要な工具や機器を、正しい使用方法に基づいて適切に操作することができる。（製作・作品）
2	使用目的や使用条件に即した機能と構造について考える。	【工夫・創造】 製作品の使用目的や使用条件を明確にし、社会的、環境的及び経済的側面などから材料、使いやすさ及び丈夫さなどを比較・検討した上で、製作品やその構成部品の適切な形状と寸法などを決定している。（ワークシート） 【関心・意欲・態度】 新しい発想を生み出し活用しようとしている。
4	構想の表示方法を知り、製作図をかくことができる。	【技能】 製作品の構想を等角図、キャビネット図及び第三角法などでかき表すことができる。（ワークシート）
8	部品加工、組立て及び仕上げができる。	【技能】 製作図を基にして、材料取り、部品加工、組み立て・接合・仕上げができる。（製作・作品）

1	評価の観点に基づき製作品の評価を行い、発表を通して他者の意見や考えを参考に次回へのまとめを行う。	[工夫・創造] 製作品を評価する観点に基づいて評価することができ、次回への参考にしている。(授業中の発言、発表)
1	製作品は大切に使用し、必要ない場合は再利用できるようにする。	[関心・意欲・態度] 製作品を大切に使用して修理できるところは修理し、長く活用しようとしている。(授業中の発言、発表)

7. 本時の学習

(1) 本時の目標

完成した製作品を評価し、次のものづくりへの課題を考えることができる。
[工夫・創造]

(2) 準備

- ・ワークシート

(3) 本時の展開

学習活動 (○)	時間	支援・指導上の留意点 (・)
(目標) ○学習の目標を知る。 ○製作中の出来事などを振り返りながら、お互いの作品を比べ、感想や意見を自由に発表する。	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの例を取り上げながら、ものづくりは、評価し改善点を見つけ改良していくことで、よりよいものが製作できることに気付かせる。 ・教科書p.16～17を参照させながら、企業などの製品開発では、評価と改善が多面的に行われていることを伝える。
(製作品の評価) ○完成した製作品のいろいろな評価方法について考え、発表する。 ○材料、機能、構造、加工、仕上がり、自分の頑張りなど、製作品の評価にはいろいろな観点があることを知る。 ○互いの考えを発表しながら、評価の観点を決定する。 ○評価の観点を自分自身で設定し、製作品を自己評価する。 ○互いに製作品の評価を発表し合う。 ○発表や友人の意見から気付いた改善点や注意点をまとめる。	42分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>[工夫・創造] ・製作品を評価する観点に基づいて評価することができ、次回への参考にしている。 (授業中の発言、発表)</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・自己評価だけでなく、友人や家族などの他者の評価、数字や金額として表す方法、製作時間や材料の歩留まりなど、さまざまな点に気付かせる。 ・製作品が丈夫で生活に長く活用していくにはどのような観点が必要か、実際の使用場面での使いやすさを判断するにはどのような観点がよいか等の発問を行う。 ・製作中の気付きや反省をポートフォリオに蓄積しておき、評価に効果的に生かす。 ・発表を聞く際に、気付きや感想をメモできる評価用紙を用意しておく。 ・製作品の欠点や改善点ばかりに目が向きやすいため、長所やよくできた点にも注目するよう声をかける。
(まとめ) ○学習内容をまとめる。	3分	<ul style="list-style-type: none"> ・学習のまとめを行う。

8 本時の学習を終えての生徒の変容

お互いの作品の良い点や改善点を出し合い、学び合いの中で交流活動を行ったことで、自分の気づかなかった良い点や改善点を知ることができた。また、良い点を上げられると自分で設計し作り上げたものが認められたと感じ、達成感をもつことができた。さらに、このことが自信へとつながっているように見受けられた。次のものづくりへの課題に関しては、この後に自由作品を制作したのだが、しっかりと強度や仕上がりの美しさなどの各個人の課題を考えて、改善をはかろうと意欲的に取り組んでいる生徒が多数いるように見受けられた。

9 成果◎と課題●

- ◎学び合いを行ったことによって、様々な考えを知ることができた。また、自分の考えを説明することによって、より理解を深めることができた。
- ◎良い点を指摘されることで、自信へとつなげることができた。
- ◎指摘されたことを参考にして自由作品の制作に意欲的に参加できた。
- ◎事前に学習していた強度についても改善された作品が製作できた生徒も多数いた。
- 賞賛することはできても改善点を上げられない生徒が何人かいた。
- 改善点をよく理解できずに次の課題へのアイデアにつなげることが難しかった生徒がいた。
- 調べた製品のまねをして、似たようなアイデアしか出ない生徒がいた。
- 考えさせる課題が、答えを導きやすいものにしたために、一通りの答えは出せたが、より発展的な考えを出せる生徒が少なかった。

保健体育科学習指導案

平成28年10月18日(火)第2校時
第2学年2組 女子15名 (於:中学校武道館)
指導者 内田 洋平

1 単元名 柔道

2 単元について

(1) 単元観

〈一般的特性〉

柔術、柔の名称で呼ばれる柔道は、武技・武術などから発生してわが国固有の文化であり、相手の動きに対応して、せめたり、防いだりするところに楽しさや喜びを味わうことができる運動である。

○柔道として次の特性があげられる。

- 1 柔道衣を着て直接相対し、投げ技や固め技を用いて攻防を展開する対人的な運動である。
- 2 相手の動きや技に対応して技をかけ、相手を投げたり、抑え込んだりする競い合いが楽しい運動である。

〈生徒から見た特性〉

- ・投げられたら、痛そう。
- ・1対1でやったら楽しそう。
- ・テレビで見る。カッコいい。おもしろそう。

(2) 指導観

柔道は、ほとんどの生徒が中学校に入学して初めて触れる運動である。安全面や技を覚えるにあたり、受け身がしっかりとできないといけないなど、基礎基本がとても重要視される運動でもある。

今日、伝統的な行動の仕方に留意して互いに相手を尊重できるようにするという目的や、他の運動に比べ「礼法」を重んじていることとして、武道に求められるものが多くなってきている。このような点から、基礎基本となる受け身や固め技をしっかりと習得させ、簡単な技能習得はもちろんのこと相手を思いやる気持ちや礼儀作法も身につけさせていきたい。活動の中では、身体的なことを考えグループ編成をし、恐怖心を和らげるようにゲーム感覚を取り入れた練習も行いたい。また、視聴覚機材を使って技能を説明するなどし、グループで教えあう場面も作り課題を解決できるようにしたい。

3 単元の目標

- (1) 柔道の特性や学び方に触れ相手を尊重し励まし合ったりよい面を認め合ったりするなどして、柔道に親しみ積極的に練習に取り組もうとする。(運動や健康・安全への関心・意欲・態度)
- (2) 柔道の技の習得に向けて、練習を工夫できる。(運動や健康・安全への思考・判断)
- (3) あらゆる場面で受け身を取ることができる。相手の動きに応じ、基本となる技を用いて、抑えたりするなどの攻防を展開する技能を身に付ける。(運動の技能)
- (4) 柔道の特性や成り立ち、技術の系統性・構造、合理的な練習の仕方を理解し、知識を身につける。(運動や健康・安全についての知識・理解)

4 指導計画

(1) 評価基準

運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動の技能	運動についての知識・理解
・自分に適した技を習得し相手の動きや技に対応した攻防や勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わおうとする。 ・礼儀作法を重んじて相手を尊重し、自分を律する態度で練習や試合を行うことができる。	・受け身や技を身につけることができるよう、実技の本、学習カードを活用して活動している。	・基本動作ができる。 ・得意技で相手の動きに対応した練習や試合をすることができる。	・柔道の特性や学習の進め方、基本動作や対人的な技術の構造、自分や相手の課題にあった練習や試合の仕方練習計画の立て方をわかる。 ・礼儀作法、試合

<ul style="list-style-type: none"> ・ルールを守る。 ・用具や服装、練習場などの安全を確かめたり、禁止技を用いないなど練習や試合をする上で安全に留意する。 		の運営やルールがわかる。
--	--	--------------

5 本時の指導（9時間中5時間目）

（1）目標

- 規則や礼法、約束を守り自他の安全に気付けながら運動しようとする。〈意欲・関心・態度〉
- 互いに観察し合い、互いにアドバイスをすることができる。〈思考・判断〉
- 基本動作を意識し、正しい受け身を身につける。抑え技を習得して、相手との攻防を楽しむ。〈技能〉

5 本時の指導（9時間中5時間目）

（1）目標

- 規則や礼法、約束を守り自他の安全に気付けながら運動しようとする。〈意欲・関心・態度〉
- 互いに観察し合い、互いにアドバイスをすることができる。〈思考・判断〉
- 基本動作を意識し、正しい受け身を身につける。抑え技を習得して、相手との攻防を楽しむ。〈技能〉

（2）展開

学習活動 ・予想される児童の意識	時間	支援及び指導上の留意点・評価 【◇は評価】
1、柔道着の着用・整理 2、挨拶、出席確認、健康状態の確認をする。 ・正座～座礼 3、本時の説明 ・ねらいを確認する。 <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 安全に柔道の学習ができるように基本となる受け身を正に身につける。 </div>	1 5 分	<ul style="list-style-type: none"> ・素早く着替え、帯の結び方を支援する。 ・服装の確認を行う。 ◇正座や座礼のしかたを理解し、正しく行おうとしている。（関心・意欲・態度） ・本時の流れを理解できるようにし、活動に意欲をもって取り組めるように、活動内容を確認し、ねらいを説明する。 ・流れ、活動内容、ねらいを確実に把握できるよう、正しい姿勢、顔をあげさせて話をする。
4、準備運動・ドリル運動 道場3周 ストレッチ 手押し車 背中合わせ～おでこタッチ 仰向け～おでこタッチ		<ul style="list-style-type: none"> ・大きな声で元気よく、準備運動ができるよう、適宜声かけを行う。 ・ストレッチは各関節を意識できるように、呼吸やリラックスして行うようにする。 ・おでこタッチでは、危険も伴うため、くれぐれも安全について留意して行うようにする。 ◇決まりや約束を守り安全に留意して、けがの防止に努めようとしている。（関心・意欲・態度）
5、受け身の練習 ・後ろ受け身 長座～10回 蹲踞～10回 立位～5回 2人組～3回	1 0 分	<ul style="list-style-type: none"> ・正確な受け身ができるよう、手だけでなく、腕全体を使って畳をたたかせるようにする。 ・後頭部を畳に打ち付けないよう、帯の結び目をしっかり見て行うようにする。 ・前回り受け身では、安全に留意し、危険がないよう、進行方向を決め、畳全体に広がって一定の距離をとるよう声かけを行う。

<ul style="list-style-type: none"> ・横受け身 長座～6回左右交互 蹲踞～6回左右交互 立位～6回左右交互 ・前回り受け身 左右各3回ずつ 		<ul style="list-style-type: none"> ◇お互いの技能が高まるよう考えながら相手にアドバイスを送ろうとしている（思考・判断） ◇ポイントをおさえた受け身をとることができている。（技能）
<p>6、固め技の練習</p> <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>固め技の抑え方や逃げ方をきるようにする。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・袈裟固め ・前時の復習をする。 <p>【生徒の反応例】</p> <p>抑え方：バランスを保つ。 相手の腕を脇ではさむ。</p> <p>逃げ方：力任せに返す。 うつ伏せになるように、体を反る。 相手の背中を引っ張り、返す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・袈裟固めをした状態で、簡易試合を行う。 20秒3セット（受け取り交代） 	<p>1 5 分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に行った袈裟固めのポイントを確認し、攻防をより楽しめるようにする。 ・ポイントを確認した後に、しっかりと抑え込むために何が必要か考えさせる場を設ける。また、逃げ方についても、どのようなことを意識すると逃げられるかについて考えさせるようにする。 <p>◇基礎的な動作を理解し、抑え方を素早くすることができる。（技能）</p>
<p>7、集合・整理運動</p> <p>8、本時のまとめ</p> <p>9、次時の確認</p> <p>10、挨拶、片付け、解散</p>	<p>1 0 分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2列横隊で整列し、普段使う頻度の少ない筋肉をほぐすように行う。 ・健康状態のチェックを確実にを行う。 ・受け身・袈裟固めを行って、意識したポイントやよくできたところ、次時に生かしたいところなどを振り返る場を設ける。 ・学習カードを活用し、個人の反省点などを記入する。 ◇学習カードを確実に記入し、反省することができている。（思考・判断）

6. 手立ての工夫に伴う生徒の変容

1) 「まねる」「できる」「わかる」で生徒がどう変容していったか。

・「まねる」→前時の振り返りや教師の師範、視覚的教材を用いて、受け身や固め技を行うことで、目で見て分かる部分と、実際にやってみることで、多くの生徒がポイントをおさえた技をまねることができた。

・「できる」→正しく正確にできるよう、ポイントを説明することで、正しくできるようになった。

・「わかる」→固め技について、生徒が実際にやってみて、うまくできたところをお互いに教え合うことで、生徒の言葉で言わせたことで、多くの生徒がうまくできそうなポイントを理解して実践することで理解できた。

2) 「めあて」の設定において、生徒からの自発的な設定をどう誘発しようとしたか。

・保健体育科という教科の特性からすると、生徒からの自発的な設定の誘発は難しいところがあり、教師主導にめあての提示になってしまった。

3)「振り返り」で授業前と授業後と比較し、どのような変容が見られたか。

・めあてと振り返りのつながりを意識して授業を組み立て、生徒の振り返りには、学習カードを用いた。生徒は、めあてを意識して、授業に取り組めた結果、固め技で上手くできた点や次時に意識したいことなどを明確に記入できていた。

7. 授業の反省

授業を組み立てる際、体育科の授業の特性でもあるねらいを2つ設定することによって、効果的な技能習得の時間を取ることができた。また、教師の発問や話し合い活動を極力最小限にすることで、活動時間を十分に確保することができた。さらに、柔道という中学校で初めて学習する内容であり、さらに、「痛い」「怖い」「けがをするかもしれない」などといったマイナスイメージを持っている生徒もいる中での授業だったが、正しく受け身を取れば痛くないことに気付かせることができた。

4. 成果◎と課題●

◎しっかりと抑え込むために何が必要か考えさせる場を設け、さらに逃げ方についても、どのようなことを意識すると逃げられるかについて考えさせ、発表・共有することによって、技能のポイントを生徒の言葉から拾い出し、意識して取り組むことができた。

◎ドリル運動を取り入れることで、柔道を行うにあたっての体の使い方を理解し、主運動につなげることができた。

●「めあて」を生徒からの自発的な設定をどう誘発しようとしたらよいかを、保健体育科の授業でどのような方法で提示していくかを模索したが、やはり教師主導によるめあて提示になってしまった。今後の課題である。

●生徒自らが行っている動画を見せる場面を作れるとよかった。そうすることにより、どこができていて、どこができていないのか、より具体的に指導できたと思う。

音楽科学習指導案

平成28年7月15日（金）第2校時

1年3組（音楽室） 指導者 星野 江理

1. 題材名 クラス合唱の曲に親しもう

2. 本時のねらい

合唱曲を鑑賞する場面において、感想を書く際に、教師が挙げた言葉を参考にし、その言葉を使って自分なりの表現に結びつけ、その曲の特徴をわからせる。

3. 展開

学習活動（生徒の視点）	時間	指導の詳細及び評価（教師の視点）
1. 千代田中校歌を歌う。 2. 「We'll Find The Way」を歌う。	10	○のびのびと歌えるよう声かけをおこなう。（歌っている様子の観察）
クラス合唱曲を聴いて、自分なりの言葉で表そう。		
3. 気付いたことや感じたことを書くために必要な語句を確認する。 4. 合唱曲を聴く。	20	○語句（明るい・暗い・楽しい等）をいくつか挙げ、それらの語句を使わせる。 【まねる】 ○最初のフレーズを聴いて、曲の雰囲気を確認してから、【できる】曲の全体を聴かせるようにする。【わかる】 （鑑賞の様子の観察、発言の様子の見取り）
5. 「unlimited」について知る。	15	○「unlimited」を聴かせ、どのような感じ・雰囲気なのかを確認し、歌詞の理解ができるように楽譜をよむように伝える。
6. 振り返り	5	○学習のまとめをおこない、本時の学習を振り返る。

4. 教員の手立ての工夫に伴う生徒の変容

「まねる・できる・わかる」

〔まねる・できる〕

・指導者が気付いたこと等を書くための語句を示すことで、低位層の生徒でも、取り組むことができていた。

〔わかる〕

・曲の雰囲気をあらかじめ感じ取ってから鑑賞したことで、自分なりの意見や思いを書くことができた。

「めあての設定」

・合唱練習のめあての設定において、音楽科における〔共通事項〕（強弱・速度等）をいつも意識させるようにしたことで、生徒主体でめあて設定をすることができた。

「振り返り」

- ・ 毎時間、振り返りの時間を設定し、「A・B・C」で自己評価をさせることで、客観的に評価させ、文章で「できたこと・気付いたこと」等を記入させた。次時は、「このように～したい。」等を書く生徒が増え、意欲付けをすることができた。

5. 授業の反省

本校の生徒は、鑑賞の授業で「何を書いてよいのかわからない」と感じている割合が高い。本時では、鑑賞するために必要な語句を確認し、曲の雰囲気を感じさせてから、自分の意見を書かせたことで、苦手意識を取り除くことができた。自分の意見を書きやすかったという生徒が多かった。合唱大会への意欲も高まったと思う。

6. 成果と課題：成果◎ 課題●

◎「まねる」ことを意識させたことで、「できる」と感じる生徒が増えた。

◎「できる」と感じられることで、学習意欲が上がり、音楽に対する興味・関心をもたせることができた。

●「まねる」だけでは、鑑賞する際に、自分の言葉でまとめることが難しいと感じた。

●「まね」をしているだけでは、自力解決につながっていかないため、授業の工夫（教師の言葉がけの工夫・課題提示のしかたの工夫等）が必要だと感じた。

家庭科学習指導案

平成28年9月20日(火) 3・4校時 調理室 27日(火) 3校時 教室
2年2組 指導者：太田康子

①単元名 野菜の調理をしよう

②本時のねらい

廃棄率の求め方を知り(まねる)、実際に調理をする中で、野菜の処理前と処理後の重さを量り(できる)、計算して廃棄率を出すことで、野菜の調理上の性質を知りながら、エコ調理の意識を高めることができる。(わかる)

③授業の概要

20日(火) 3・4校時

学習活動(生徒の視点)	時間	指導の詳細及び評価(教師の視点)
1. 衛生面を整える 2. 本時のめあてを確認する。	10	○声を掛けることで、衛生面の徹底を図る。 ○実習を通して、野菜の調理上の性質を知るだけでなく廃棄率の実験を行うことを伝え生徒の興味関心を高め、めあてを確認できるようにする。
エコを意識しながら調理を行い、野菜の性質を知ることができる。		
3. 説明を聞いて、廃棄率の出し方を知る。		○廃棄率の出し方を伝えるために生徒を集めて、2種類の野菜の処理前と処理後の重さを量り、実演して説明する。(まねる)
4. 計画表にそって調理をする	60	○グループで分担を確認し、みんなで協力しながら作業を進めるように声を掛ける。(できる)
5. 試食 6. 片付け 7. 振り返り (次時、教室で行う)	30	○試食をしながら、野菜のかたさや味つけ、手際の善し悪しについてグループで話すことで、振り返りにつなげる。 ○ワークにまとめを行うことで、生徒の理解を見取る(できる) ・野菜の調理上の性質 ・廃棄率を越えてしまった原因 (皮を厚くむいてしまった。ヘタ取るときに可食部分も捨ててしまった。) ・野菜の可食部を無駄にしないだけがエコ調理ではないこと (節水の工夫、適量の洗剤液を使うこと、ゴミをなるべく出さないこと等) ○廃棄率を守ることに安全面を大切にすることを確認する。 ・じゃがいもの芽を取り除くこと。腐っている部分は調理せずに捨てること等
〈評価・見取り方法〉 ワークシート		

④教員の手当の工夫に伴う生徒の変容

(1)「まねる」「できる」「わかる」で生徒がどのように変容していったか

「まねる」の時間があつたことで、全員が活動方法に迷うことなく「できる」の活動を行うことができた。「わかる」で振り返りを行ったことで、体験的・実践的な学びをより深めることができた。

(2)「めあて」の設定において、生徒からの自発的な設定をどう誘発しようとしたか

前時の学習で「廃棄率」について少しふれておいたことで誘発しやすかった。「今回の調理は廃棄率を出す」と伝えた時点で、生徒から「野菜の無駄にしないで調理をして食べる」、「ゴミを少なくできる」などの声があがり、生徒とテーマを設定することができた。

(3)「振り返り」で授業前と授業後と比較し、どのような変容がみられたか
その後の調理実習では廃棄率を求める活動はしていないが、可食部分を無駄にしないように調理しようと心掛けたり、洗剤を適量使ったり、調理で使用したお湯を食器洗いに活用したりと、エコ調理を意識した言動がみられた。

⑤授業の反省

全員が「できる」ように、「まねる」時間を丁寧にとり、学びを深めるために「わかる」の時間を多く確保したが、2時間の授業の中で振り返りまでしっかり行えるような計画を立てて展開することがのぞましいように感じた。「まねる」「できる」「わかる」の時間配分を考えていきたい。

⑥成果と課題 (◎成果 ●課題)

◎実習と廃棄率の学習を同時に行ったことで、生徒は生ゴミをできるだけ出さないように、また、それぞれの野菜の可食部分を無駄にしないように、考えながら調理をする姿がみられた。「野菜の性質を知ること」、「エコの意識をもつこと」とめあてを2つ持たせた分、振り返りの時間を多くとることで学習を深めることができた。

◎グループの人数を2、3人と少人数にしたことにより、生徒一人ひとりの活動内容も充実しているように感じた。

●ワークシートの改善

●授業の時間配分

5. 各教科部会の検証

国語科 校内研修検証

○授業中の生徒の様子

国語科では、説明的文章で段落や場面の要点をまとめる学習に於いて「まねる→できる」の形を繰り返すことが有効であった。「まねる」過程でまとめ方のパターンを理解することで、そのあとの段落や場面の要点をまとめることに自信を持って取り組むことができていた。また、書いた文章を推敲する学習でも「まねる」過程で練習として推敲することで、推敲の際に気をつけることや文章を正しく直す方法を身につけることができた。このことは、文章を書く際にも気をつけることができるようになった。この「まねる→できる」のパターンを定着させたことで、授業に意欲的に取り組む生徒が増えた。

○定期テストの得点の推移

定期テストの得点を見る限りでは大きな変容は見られなかった。しかし、基礎的な内容についてはきちんと身につけている生徒が多く、「まねる→わかる」の過程を積み重ねることで、得点についても伸びてくるものと考えている。

数学科 校内研修検証

○授業中の生徒の様子

数学では問題の解き方のモデルを参考にしていくことが多いため、「まねる→できる」の形を繰り返すことが有効的であった。「まねる」があるので、生徒の中でも安心して課題に取り組むことができていた。この「まねる→できる」のパターンが定着したため、スムーズな授業展開ができた。そのため、基礎を確立しやすくなり、授業中では「わかる」にあたる課題に対して積極的に生徒が取り組み、挙手をするようになった。

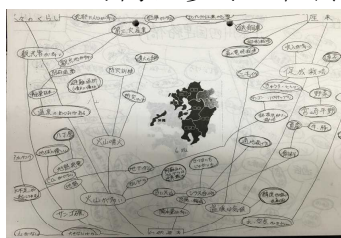
○定期テストの得点の推移

「まねる→わかる」のパターンがあるので生徒も安心して授業に取り組むことができ、特に計算中心の単元において技能の観点では、正答率が約80%となった。苦手であった図形や証明の単元においても技能の観点では70%以上の正答率を残した。目立った得点の推移はみられなかったが、基礎の力は確実に身につけている。

社会科 校内研修検証

○授業中の生徒の様子

一人では考えつかないことが、グループで調べたり、話し合ったりすることで思考の広がりを見ることができた。そして、単元のまとめの授業において、学習した事をウェブマップに表すことで、単元全体が整理でき、それぞれのつながりの有無が確認できた。この活動をくり返し行ったことで、生徒の社会的な見方・考え方に大きな広がりを見せた。(下記図参照)単元が違うので単に比べられないが、どのクラスも各授業が充実し、単元のまとめの時間に多くの社会的事項を上げることができた。



九州地方のまとめ



中部地方のまとめ

○定期テストの得点の推移

46点→59点→57点。定着確認テストの平均点の推移である。3学期は少し下がってしまったが、全体としてはよい結果であった。3学期末に再びテストがあるのでそこの解答を分析し、3年へつなげていきたい。

○まとめ

「見方・考え方」の力をつける教科が社会科である。生徒には、資料を見て、「なぜこうなるのか?」「これはどこだろう?」「何だろう?」と疑問をもたせること必要である。もたせることができれば、授業のめあてに対して意欲的に進めることができる。そして、グループやペアで「まねる」「できる」という過程を通して、考えを深めることができれば、「わかる」授業ができると考える。そのために「はじめ」「中」「終わり」を意識した授業づくりと「振り返り」の充実をさらに図っていきたい。

理科 校内研修検証

○授業中の生徒の様子

理科の授業において、実験の方法や資料を扱うため、「まねる→できる」の形を繰り返すことは有効であった。また、考察においても方を決め「まねる→できる→わかる」を意識して1年間授業を行っていった。「まねる」の段階でいかにわかりやすく提示するかで生徒の授業への関心に大きく関わってくることもわかり、授業改善につながっていった。授業をパターン化することにもつながり、生徒も安心して授業を受けられているように感じる。また、「わかる」の段階で多くの問題を扱うようにしていった結果、基礎を確立しやすくなり、課題に対して生徒が積極的に取り組むことができ、挙手が増えることにもつながった。

○学力テストの得点の推移

第1回…44.9 第2回…54.5 第3回…54.5

3回の学力テストの平均点から、生徒の学力が伸びていると実感している。「まねる→できる→わかる」の授業パターンで構成することを意識した結果、実験の考察において、自分の言葉で表現できる生徒が増えていった。これが点数の向上につながったと考えている。

英語科 校内研修検証

○授業中の生徒の様子から

英語の授業を英語で行っていく上で、mim-memの形で「まねる」→「できる」を習得させていくことは、非常に有効である。2年生までは、演繹的に文法の理解と習得を重ねていくことが比較的容易であることも分かった。また、演繹的に学習活動を重ね、最後に一般化する作業を、振り返りの場面で課すことは、「できる」→「分かる」に繋がり、同時に、一人一人の習熟度や理解度を推し量る有効な材料になることも分かった。英文法の説明をせずとも、最後の一般化する場面では、8割を超える生徒が、使用場面や意味を、授業中の学習から推し量ることができるようになっていく。

○テストから

リスニングテストの得点率が高いことは、普段の授業を英語で行っていることが大きく起因していると考えられる。また、「まねる」→「できる」のパターンで学習活動を行っていることで、生徒の活動量、練習量は飛躍的に伸び、授業中に扱った題材についての、または著しくそれに近似した問題については、得点率が高い。課題としては、応用問題や初見の問題についての得点率が低いことが挙げられる。普段の授業の「まねる」→「できる」→「分かる」のパターンが、基礎学力を伸ばすことに有意である反面、応用力を伸ばすためには、更なる改善と工夫が必要であることが分かった。

技術科 校内研修検証

○授業中の生徒の様子から

第一学年の「木材加工」の単元において、まずは、全員が同じ作品をつくる作業を行った。ここで、教師が各工具の使用の実演を行い、次に生徒が「まねる」という流れをつくった。ここでの基礎を基に正しい工具の使い方が「できる」ようになった。最後に自分たちで設計したものを作成させ、今まで学習してきた「強度を保つにはどうしたらよいか」、「仕上がりを美しくするにはどうしたらよいか」などの内容が「わかる」ようになった。

○振り返り記述の変容

生徒は、最初のうちはノコギリやげんのうの使い方不安をもっていたが、作業を進めていくうちに、自然と班の仲間たちと教え合い、学び合いを行い、徐々に自信をもって、「できる」ようになっていった。また、友達との話し合いから、美しい作品を作るためにはどうしたらよいかを考えることもできた。そして、自分の設計した作品を作り上げ、みんなが達成感をもつことができた。さらに、廃材を使った自由作品の制作では、みんな笑顔で発想豊かな作品をつくることができた。このことから「わかる」ということが達成できたように感じた。

保健体育科 校内研修検証

○授業中の生徒の様子

保健体育科の学習では、「まねる」「できる」「わかる」というスモールステップを意識した授業を行うことで、どの生徒も自然な流れで授業に意欲的に参加できているように感じる。技能習得では、「まねる」の部分は、ICTを活用し、技能の確認ができる動画を使用したり、教師の模範を行ったりすることで、実施してきた。「できる」の部分では、見せ合ったり、アドバイスし合ったりすることで技能習得につながった。「わかる」の部分では、技能のポイントを生徒同士で共有することでポイントを理解することで、『こうやればできるんだ』『ここを意識すればできるんだ』など気付きにもつながった。一人ひとりが自分の力と向き合いながらめあての達成に向けて前向きに学習する様子がみられた。

○まとめ

保健体育科の特に体育の分野では、技能習得の部分では、「まねる」「できる」「わかる」というスモールステップの授業構成はとても効果的であると感じた。ただ、体育科の授業では、常にこの構成で授業を進めていくのは、体育科の授業では難しいと感じた。

音楽科 校内研修検証

○授業中の生徒の様子

「まねる」「できる」「わかる」を意識した授業展開をすることで、学びへの意欲が上がった生徒が増えた。授業の初めに、簡単なミニテスト（音楽の記号や語句）をすることで、自信をもって授業に取り組める生徒が増え、授業中に挙手する生徒が多くなった。また、教師が範唱したり、範奏したりすることで、生徒がイメージしてから、歌唱したり、演奏したりすることができるようになった。

○まとめ

「まねる」「できる」「わかる」というパターン化がされていると、生徒が授業の流れを見通すことができるようになり、自信をもって取りくめることが多くなったと思う。しかし、実技教科の特性として、音楽科のすべての活動で「まねる」「できる」「わかる」を意識した授業展開は難しいと感じた。

家庭科 校内研修検証

○授業中の生徒の様子

「まねる」「できる」「わかる」というスモールステップを意識した授業を行うことで、どの生徒も自然な流れで授業に意欲的に参加できているように感じる。「できない」「わからない」「今何やればいいの」と発言したり、悩んだりしたりして、活動が止まったりする生徒はほとんどいなく、一人ひとりが自分の力と向き合いながらめあての達成に向けて前向きに学習する様子がみられた。

○まとめ

座学時は授業の展開が考えやすいが、実験・実践的な学習時は、特に「まねる」で決して時間を掛けすぎることなく簡潔に、全員が理解できるように教員が準備をすることが、その後の「できる」の学習をスムーズにさせ、「わかる」で学びを深めることができるように感じた。特に技能教科では「まねる」「できる」「わかる」の時間配分やその工夫が必要であるように感じた。学校内だけでの学びではなく、いかに家庭生活に繋げていくことができるかというところまで検証していけるのが理想である。家庭科の学習内容の本質は家庭で生かすことが本当の「わかる」になるのではないだろうか。

VI. 成果と課題

1. 成果

- ◎ある単元が始まる前に、教科部会などで単元のめあてを確認するなどの話し合いの場が増え、授業の前に、生徒につけたい力を確認する教科が増えた。
- ◎「まねる」「できる」「わかる」という段階を意識することで、「めあて」「振り返り」が授業の中で習慣化してきた。
- ◎第二学年では、家庭学習への意識の高揚が見られ、毎日自主勉ノートを提出する生徒が大幅に増加した。
- ◎各教科で、教科部会を開く頻度が高まり、「英語科通信」を模して「数学科通信」が発行されたり、テスト後の振り返りシートが教科を越えて共有されるなど、教科を越えた繋がりも多く見られた。
- ◎各教科において「振り返り」の記述において、設定された「めあて」を意識して「振り返り」を行える生徒が増え、単なる感想を書くだけの「振り返り」が減った。
- ◎第二学年において、学年全体で自主学習の提出率を上げるための働きかけを通年で行い、軒並み90%を上回っていた。授業の中で、自主学習のやり方を「まねる」ことから始めさせ、「できる」ようにさせてから家に持ち帰らせることで、家庭学習にどのように取り組めばよいかを「わかる」生徒が増えたことも大きな要因になった。
- ◎中学校における家庭学習の位置づけを、量→質とし、各学年で家庭学習の定着から質の向上へとつながるよう働きかけ、家庭学習の共有化を図った。
- ◎数学科、英語科では顕著に学力低位に位置していた生徒の学力の向上が点数に表れた。

2. 課題

- 模倣の形を基本とする「まねる」からの導入の授業が、応用力の伸長に、いかに結びつくのかについて、より深い研修が必要だと感じた。
- 「まねる」「できる」「わかる」という授業過程が適合しない教科（授業）について、検討が必要であった。
- 授業過程をどのように繋ぐかを位置づける「ねらい」「振り返り」の定着は進んだが、質の向上に繋げることが不十分であった。
- 「基礎的・基本的な知識・技術の習得」との強い相関性が立証されたと言えるほどの確固たるエビデンスが検証されなかった。

研究に携わった教職員

大木 博一
 増尾 信行
 山本 惣一
 砂川 洋
 下山 智太郎
 内田 洋平
 伊藤 真江
 山内 美奈
 星野 江理
 川島 宏文
 吉田 千尋
 江原 悦子
 アイ・ナンニチ

須永 努
 吉田 旬
 竹部久美子
 八木絵理子
 粕川 実沙
 中野 聡
 山形 栄治
 加藤 和枝
 田中 知子
 金子 絢香
 矢坂 さい子
 福島 律子
 村田 妙子

中里 剛志
 太田 康子
 夏目 亮
 樽見 昭
 飯塚 大介
 黒澤 宏明
 鈴木 萌人
 大出 智香
 飯田麻衣子 (育休)
 荻野 由佳
 コルター・ジェームスJr.
 橋本 礼華

千代田町立千代田中学校

〒370-0503

群馬県 邑楽郡 千代田町 赤岩 1920

TEL 0276 (86) 3222

FAX 0276 (86) 5731